

佐賀大学工学部知能情報システム学科
20周年記念誌

平成 20 年

佐賀大学工学部知能情報システム学科

20周年記念誌のはじめに

編集代表・渡辺健次
(2007年度学科長)

佐賀大学工学部知能情報システム学科は、前身の情報科学科が1989年に1期生を受け入れてから、ちょうど20年の節目を迎えました。この20年間で多くの卒業生を社会に送り出してきました。多くの研究成果を挙げることもできました。教職員の転入・転出、定年退職もありました。それと同時に、学科設立当時の記憶は、関係者の頭の中から薄れてきつつあります。

そこで、学科設立から20年を機会に、これまでのあゆみを振り返る記念誌を作成することにしました。学科設立当時の話、教職員の思いで、卒業生の声などで構成されるこの本は、これまでの歩みを記録する資料であると共に、これからの学科の発展を考える上で多くの知見を与えてくれると確信しています。

最後に、年度末・年度初めの忙しい時間を割いて、この本のために原稿を作成し、お送りいただいた全ての方々に、感謝を申し上げます。

情報科学科・知能情報システム学科創立20周年記念誌に寄せて

佐賀大学長
長谷川 照

知能情報システム学科の設置20周年おめでとうございます。

佐賀大学四十年史をみますと、知能情報システム学科の前身である情報科学科が設置されたときのスタッフは5名でした。近藤弘樹先生と上原健先生のお二人が教授として就任されています。両先生はそれぞれ物理学科と数学科からの転任です。その後、着任された新井康平先生、渡辺義明先生、林田行雄先生は工学部の出身ですが「生粋の情報育ち」ではなかったと記憶しています。若い学問を反映していたのでしょう。

情報科学科の誕生は、科学技術立国のもとで成長続けてきた理工学部到最后に設置された学科であるとともに、学部の理念である「理工融合」を象徴する野心的な学科でした。この融合学科の飛躍的發展に刺激されて、理工学部は、平成9年度に学部改組（知能情報システム学科に学科名変更）、平成13年度に大学院前期課程の改組を行い理工融合の理念を実現する体制を創り上げました。

また、情報科学科・知能情報システム学科は佐賀大学の情報機能の開発と充実に多大な貢献をされてきました。佐賀大学は、情報科学科の設置に伴い電子計算機センターを廃止して佐賀大学の情報処理の中心となる情報処理センターを設置し、平成12年には学術情報処理センターに再編して教育・研究面を強化してまいりました。法人化後平成18年にこの学術情報処理センターは、学術情報環境の整備推進と電子図書館機能の充実に図る、基幹情報システムを統括する総合情報基盤センターに成長しました。

21世紀の情報化社会＝グローバル化社会に向かって、この20年間（1988～2008）、教育と研究、とりわけ社会に対する貢献において知能情報システム学科の果たしてきた役割は極めて大きかったものと敬意を表します。

さて、今後の20年間、知能情報システム学科の皆さんはどのような構想をお持ちですか？ご承知のように佐賀大学は中長期ビジョンを策定しました。中長期ビジョンは、21世紀のはじめにあたって、佐賀大学の教育、研究、社会貢献の基本的な有り様、方向性を示したものです。そこには、学部・学科について述べていません。21世紀の大学は、学部・学科の枠を超えてそれぞれの学問分野の将来構想を描かねばなりません。

20年前の情報科学科の設立趣意書は、「本学部は、国立大学唯一の理・工の複合学部としての特徴を活かし、発展してきているが、最近の情報関連企業からの求人が急増し、変化の激しい科学技術の進歩に対応できる**基本的素養と柔**

軟な思考能力を身に付けた意欲的な人材を求める声は大きく、また、研究協力への期待も大きい。」と述べています。情報科学が野心的な分野であることは今でも変わりません。情報科学科・知能情報システム学科の創立20周年を契機に、これからの20年後を見通して、皆さんが創り上げる情報科学の将来構想を楽しみにしています。

学科設立20周年に寄せて

理工学部長
中島 晃

理工学部知能情報システム学科は、その前身の情報科学科の設置が1988年4月でしたので、今年が創立20周年という記念の年を迎えています。当初理学系の学科として入学定員40名でスタートしましたが、1992年には知能情報学講座の設置により学生10名の増員があり、さらに1997年には11学科を7学科に再編する理工学部の学科改組により、情報科学科を知能情報システム学科と名称変更するとともに、入学定員を60名に改訂、理工融合を象徴する学科の一つとして今日に至っています。学科創設に携わった方々、並びに草創期から20年間に亘り着実な歩みを続けてこられた学科教職員を始め関係各位のご努力に深甚なる敬意を表したいと思います。

当学科では、ITに関する理論、コンピュータやインターネットを中核とした高度情報システムの企画・開発・活用などに関する系統的な教育・研究を行っており、また最先端のネットワーク環境を使い、他大学とも連携して遠隔教育システムの開発等にも力を入れているところです。なお、知能情報システム学科の教育プログラムは、理工学部の先陣を切って平成15年度にJABEE（日本技術者教育認定機構）に認定されていますが、これは佐賀大学内では初、情報分野では全国でも2番目の快挙であり、その先見性は高く評価されると思います。

高度情報化社会を支え、将来幅広い分野で国際的にも活躍できる人材の育成を目指して、知能情報システム学科が今後益々充実・発展することを祈念する次第です。

2008年4月

佐賀大学理工学部知能情報システム学科設立 20 周年に寄せて

情報処理学会九州支部長
九州工業大学情報工学部教授/副学部長
尾家祐二

佐賀大学理工学部知能情報システム学科が 20 周年を迎えられたと伺いました。まことにおめでとうございます。私ども九州工業大学情報工学部とほぼ同時期に設立されたことは、九州におけます情報工学分野の教育・研究を推進する上で、互いに大きな励みであったと思います。

この 20 年間、貴学科は多くの優秀な卒業生・修了生を社会に送り出すと共に、優れた研究成果を挙げてこられました。九州地域の情報系学科で最も早く JABEE の認証を取得されました。地域社会への貢献も大であり、私の専門分野である情報通信分野においても、次世代高度ネットワーク九州地区推進協議会などの活動を共に行ってまいりました。

情報処理学会九州支部の活動においても、2002 年度に近藤先生が支部長を務められた他にも、多くの方々が幹事や評議委員に就任されています。また、九州支部が主催する学会や研究会でも、毎回多くの研究発表を行われており、研究内容も高く評価されています。

次世代高度ネットワーク社会に向けて、ICT 分野のさらなる発展が期待されています。同じ九州地域にある大学として、お互いに切磋琢磨しつつ、様々な分野における研究に取り組んで参りたい所存です。

改めまして 20 周年おめでとうございます。今後の益々のご発展を祈念いたします。

情報科学科設立前後の経緯

情報科学科新設騒動記

都市工学科
荒牧 軍治

一本の電話

私自身がその場に立ち会ったわけではなく、あくまでも後から聞いた話なのだが、情報科学科の設置は当時の楠田学長から武藤理工学部長にかかった一本の電話から始まった。情報科学科の設置が1988年（昭和63年）4月だから、その1年前の3月頃のことだったのだろう。もしかしたら詳細な月は違っているかもしれないけど、とにかくあわただしかったことが言いたいので、細かい点は詮索しないでいただきたい。武藤先生からさらに私のところに電話がかかってきた。「荒牧君、君は情報科学科を作りたいと言っていたでしょう？ ほぼ確実に情報科学科の設置ができそうだから手伝って欲しい」とのこと。なんだか狐につままれたような話である。とにかく少し詳しく話を聞いてみると、文部省の幹部クラスの方が佐賀あるいは九州を訪問された、その幹部が福岡空港で「情報科学科は面白いかもしれませんがね」と漏らされた、その話を聞いた学長が空港から学部長に電話されて「情報科学科を作りましょう」と指示を出された、どうやらそのような顛末であつたらしい。

情報科学に興味があつたのは事実だが、なぜ武藤先生が私に指示を出そうと思われたかが今ひとつはっきりしないが、もしかしたら学究肌だった武藤先生を佐賀大学の最大の紛争課題だった「寮問題」に引きずり込み、その後の先生の人生を狂わしてしまった報復だったかもしれない。他学部が評議員、学部長クラスが「学寮特別委員会」に参加して総力戦で取り組んでいたのに、理工学部だけは30代の若い助教授だけが走り回っていました。他学部の先輩諸氏から「理工も誰か責任のある教授を委員にして」と要請を受けて、強引に武藤先生に引き受けてもらった負い目があつたので、義理を重んじる私としては絶対に断ることはできない状況でした。

作業開始

既設の学科から提供してもらう必要のある3つのポストの確保と人事については、武藤学部長と前学部長で建設工学科ができるまで私が所属する講座の教授であつた高田弘先生（後の学長）に任せることにして、私が活動できる場所として、講座の構成やカリキュラムを検討するための作業部会を作ってもらい、早速活動を開始しました。今では考えられないことだけど、あの頃は委員会規則も作らずに「この指止まれ方式」で走り出していたような気がします。私と数学科の小倉先生と情報科学科設置から程なくして他大学に転出された機械工

学科の稲村先生がいたのは記憶しているけど、あと一人誰かおられたような気がするのだけど、申し訳ないがどうにも思い出せない。それに新進気鋭の西村豊事務長がたまたま理工学部にいたことが何ともラッキーだったなあと強く思います。西村事務長は財務端一筋で事務官生活を送り、主計課長補佐まで務めた人だったから概算要求の裏も表も知り尽くして、彼の指令で動けば良かったのは本当に楽だったですね。

私はというと、1982年（昭和57年）に建設工学科を1986年（昭和61年）に工学研究科都市工学専攻を設置する際に概算要求書と説明資料作りを高田先生の下でやった経験を持っていたのでどのような作業が必要か、どのような書類が必要かの想像はつきました。とはいっても学生時代に流行っていた「サイバネティックス」を聞きかじり、FORTRANのエンドユーザーに過ぎなかった私に情報科学のなんたるかが分かるわけが無く、私の役回りはもっぱら、他の先生方が話されたり書かれたりする専門的な事柄を素人の人にも分かりように翻訳することだったような気がします。

学科名を情報科学にするか情報工学にするかの議論は、一瞬で決着がつきました。「情報科学は面白そうですね」と言われた文部省の幹部は理学系を担当されている方で、「情報科学であれば応援してもらえるかもしれない」との思惑が、議論が起こることすら許しませんでした。事の善悪を越えた、地方大学が生き残る知恵です。

作業は当時岩波から出版されていた「情報科学」シリーズのタイトルを書き出してみることから始めました。電子計算機、離散数学、情報ネットワーク、オペレーティングシステムなどの言葉は何とか理解できたものの「オートマトン」でジンギスカン料理を思い出す辺りが素人の悲しさです。それでも集中的な議論と作業で何とか少しずつ形が見えてきました。岩波情報科学シリーズのキーワードをいくつかのグループに集約し、他大学の情報関連学科の講座、カリキュラム構成等を参考にすると、大まかに5つの群れに纏め上げることができました。その5つに講座名を当てはめ、講義科目を割り振るとどうやら学科構成らしくなってきました。しかし、40名の入学定員を有する学科の講座数は4講座、何とか一つ減らさなければなりません。減らすとすれば数学系に近い講座か、情報工学系に近い講座のどちらかです。ポストを提供することを学科の思惑もあり、簡単にどちらかを落とすという訳にはいきません。がっぷりと土俵中央で組み合ったままの状態が暫く続きました。

講座名決定会議

概算要求の締め切りは6月と決まっていますから、何とか決着をつけなければいけません。固まってしまった状況に決着をつけるために講座名を議論する

会議を呼びかけました。参加自由としたにも関わらず多くの先生方が参加され、会議場は熱気にあふれています。黒板に5つの講座名を書いて、夕方の6時くらいから議論を始めたのでしょうか。当然、数学科の先生方は情報基礎を推されますし、電気・電子系の先生方は情報工学に近い講座名を推奨されます。どちらも一理あり、どちらかが圧倒的に有利だと言うことは事の性質上絶対にあり得ません。つまりはどちらかに決断する以外にないのです。通常なら学部長預かりとするところでしょうが、司会者の私は最後までそれを口にしませんでした。会議が膠着状態にあった夜10時頃、私は会議に参加していた一人の若手教官に意見を求めました。彼は電気・電子系であったにもかかわらず「情報科学科を設置するのであれば、情報基礎を充実させるべきだ」と述べたのです。私は「ここは未来を担う若い人の意見に従うことにしましょう」と言いながら、情報工学系の講座名を黒板から消してしまいました。それまで情報工学系を推しておられた先生方は一瞬どぎまぎされたようでしたが、多分議論に疲れておられたのでしょね、誰からも反対の意見が出ませんでした。いや、強引に出させなかったと言った方が正確かもしれません。それで一件落着。講座名の決定です。しかし、こんな強引なやり方が後を引かないはずもなく、その若手教官は学科内でつらいじめにあっているという噂が流れていました。ずいぶん時間がたってから本人に確かめたら「そんなことはありませんでした」と言われたので、単なる噂だったのかもしれませんが、少なくとも私と高田先生は本当だと思っていました。

概算要求書、設置申請説明書

学科新設には数多くの書類を準備しなければなりません。正式文書はフォーマットが確立している「概算要求書」なのですが、こちらの方は西村事務長に任せておけば何とかできます。重要なのは、なぜ佐賀大学は情報科学科を設置したいのかを分かりやすく説明するための「設置申請説明書」の方です。こちらは別に文部省に出しなさいと言われていた資料ではないのですが、文部省の担当者を我々の味方につけるための道具、担当者が上司を説得するための武器として非常に重要なものなのです。これができさえすれば、概算要求書は何とかできます。文部省の担当者は我々が作った概算要求書にあれこれと文句を言ってくるのですが、それは担当者が上司に説明するときのことを考えているのだと思えば腹も立ちません。こちら側を向いている窓口の担当者を我々の味方につけ、向こう側を向いて説明する我々の見方にする為にはどうしても必要な書類です。

我々は、この説明書作りに集中しました。何度も議論し、それぞれが草稿を書いてくる。専門的な説明になりがちな他の先生方の文章を素人の私が少しだ

け分かりやすそうなものに変えていく。それを更に西村事務長が分かりやすいものに直していくと言う手順で作業を進めました。西村事務長は私達が書いた文章を徹底的に理解しようとしていましたね。彼のやり方はこうです。私達が書いた文章で分からない言葉が出てくると「現代用語の基礎知識」と「イミダス」で調べます。それに掲載されている言葉であれば、その内容を理解し、自分なりの言葉で修正する。もしそれに掲載されていない言葉であれば我々に書き直しを命ずる。我々の原稿はいつも彼が書き込んだ赤鉛筆文字で真っ赤でした。4年生の時に書いた卒業論文以来の久々の修行の場でした。

ある日、西村事務長が「先生、情報科学の意味、位置づけが分かる一枚の絵を書いてください」と言い出したのには本当に参りましたね。彼は、私に絵心がないこと、絵を描くのが死ぬほど嫌なことなどは全く理解していません。「絵がないとどうも分かりにくいですね」などと正しいことを宣（のたま）うのです。悪戦苦闘、七転八倒。そして描き上げたのは誰もが思いつくような一枚の大きな木の絵です。地中に張った根が数学、物理学、化学、心理学等の基礎科学で、木の枝に咲く花やたわわに実った実がコンピュータ関連の技術、情報ネットワーク、ロボット、医療機器と言った生活を豊かにする各種技術で、そしてその2つを繋ぐ大きくどっしりとした幹が「情報科学」なのだと言った訳です。特にオリジナルな表現だと威張るつもりはありませんが、本人は結構気に入っていました。情報科学の本質をもの見事に表していると鼻をうごめかせたものでした。この絵はその後あちこちで描いた気がするので別に大きな幹は情報科学でなくても良かったのかもしれませんが。それでも西村事務長に採用されたところを見ると、人を納得させる力を持っていたのだと思います。

SMALL MEETING

私達が情報科学科の概算要求に向けた作業に没頭している真最中の5月に、私が所属する講座の教授としてオーストラリアのニューサウスウェスト大学から有限要素法の分野で世界的に著名な学者である S.Valliappan 教授が着任されました。Val 先生は何にでも興味を持たれる方で「敷金と手数料は分かるが、礼金とは何か」「私が探している英語の本が図書館ではなく何故あなたの研究室に置いてあるのか」「なぜ日本の大学生は勉強しないのか、質問しないのか」等々の質問を次々と私に浴びせかけます。そのような英語での質問攻めに閉口していたのでしょね、度々「SMALL MEETING」と言い訳して彼の前から姿を消していました。とうとう我慢しきれなくなったのでしょ、何の MEETING なのかを尋ねられました。情報科学科を設立しようとしてその準備に集中的に取り組んでいる事を説明したに違いありません。たちどころに彼の質問攻めが始まります。「Gunji、なぜ専門でもない貴方がそのような作業をしなければ

ならないのか」「その作業をすると貴方の業績になるのか」「そもそも日本の教官はどのような基準で評価されるのか」私の最も苦手な「Why?」が次々と繰り返されます。「武藤学部長に対する義理です」とも言えず、**Japanese Smile**で誤魔化していたような気がしますね。山ほどの **SMALL MEETING** と膨大な作業の成果として概算要求書と設置申請説明書を6月の期限までに完成することができました。

情報科学設置へ

武藤学部長や高田先生たちが進められていたポストの振替や教官選考については全く記憶がありません。そのような作業の場には助教授は入れなかったのですから当然のことです。今教授の立場になってみると、その作業の方がきっと大変だったのだろうとは思いますが、先生方は何も仰りませんでした。

わずか4ヶ月程度でやり終えた情報科学科設立準備。文部省との交渉は武藤学部長や西村事務長それに本部の事務局長、主計課長等の仕事です。省議決定が行われる8月くらいまで続いたのでしょう。それでもあまり揉めた記憶がないところを見ると、やはり文部省の幹部の方の威光が効いたのですかね。作業をやった人間としては、我々の作業が的を射ていたと云いたいのですが。

情報科学科の建物が出来上がって、一階の部屋に教育用コンピュータが並んだのを見た時には感慨ひとしおでしたね。教育用のコンピュータシステムをレンタルできる学科に一寸だけ焼き餅も焼きましたが。

情報科学科が設立され年と同じ1988年（昭和63年）12月に情報処理センターが設立されて、私とその初代のセンター長になる羽目になったのは、情報科学科設置に尽力したことで情報の専門家と誤解されたからでしょうね、きっと。私は **FORTTRAN** のエンドユーザーに過ぎなかったのに。その頃立ち上げが検討されていたネットワークづくりに渡辺健次助手（当時）と走り回ったときの、今思えば漫画のような話は次回どこかで披露することにしましょう。

新たな旅立ちに

情報科学が設置されて20年、知能情報システム学科の入学定員数は設立時の1.5倍に増えて、拡充の道を歩いてこられました。着実に成果を挙げてこられた学科のこれまでの活動と、教員、学生の活躍に敬意を表します。地球温暖化問題、食糧問題、人口問題等、あらゆる分野の科学技術が連携して活動しなければならない地球的な課題が山積しています。その連携ネットワークの中核を担っているのが情報です。皆様方がさらに研鑽されて、地球規模の課題の最前線で活躍されることを、設立時にその一翼を担う機会を持った仲間の一人として、心から祈っています。

情報科学科設置前後の経緯

渡辺義明

学科設立の1988年は、まだインターネットの本格普及には10年ほど間があるが、銀行第3次オンラインが普及するなど、コンピュータが企業経営等の社会基盤に本格的に取り入れられてきた時代である。NEC98とMSDOSが全盛であり、MacOSとWindowsが次の覇権を競い始めた時期でもある。この年にApple社がMicrosoft社を著作権侵害で提訴している。21世紀は情報の世紀であると、情報技術者の大幅不足が喧伝され、情報系学科の設立が相次いでいた。

佐賀大学においても電気系学科では以前から情報工学科の設置を要望していた。しかし本格的に概算要求として動き始めたのは、「国立大学唯一である理工学部の特徴を生かし、理工融合の要となる理系学科を設立する」という方向であった。この方針の元で、各学科から招集した作業グループで議論して概算要求を行い、設置にこぎつけた。このため当学科は理工学部の総意の上に成立したといえる。

新学科の名称「情報科学科」については、特に議論はなかったように思う。理系学科である情報系の学科として情報科学科と名づけるのが素直であった。学生定員40名、4小講座の構成を前提として講座構成が議論された。講座名として、「情報基礎学」「数理情報学」「計算機科学」「情報処理学」「応用情報学」の5つが案として出たが、議論の結果、「応用情報学」以外の4講座構成とした。なお、「応用情報学」は後年「知能情報学」と名を変え、第5の講座として増設されることになった。講座の概要を表1に示す。理系色の強い2講座と工系色の強い2講座から構成されている。

表1：講座の名称と概要

情報基礎学	情報を科学的に理解し、扱うのに必要な基礎となる理論を教育、研究する。
数理情報学	情報を数理的に分析し、解明するための基本原理の教育、研究を行う。
計算機科学	情報を取り扱う機械である計算機を教育、研究の対象とする。
情報処理学	情報伝達、情報管理、情報処理の基本的理論を教育、研究する。

教育内容については、先行する情報系学科のカリキュラムや、情報系分野の分類表、情報系書籍・教科書題目などを参考にして議論した。情報系学科とし

ては当時、電気系母体、数理系母体、機械系母体などの様々な色彩の学科が誕生していた。広い情報分野のどの部分をどのような思想で教育すべきか統一されていず、設置にかかわった人に依存して多様な学科となっていた。当作業グループ内でも、方向性には多様な意見があった。カリキュラムは、各講座の科目として提示した科目を絞り込み、カリキュラムに収まる数へ絞り込んで構成した。表2に概算要求時のカリキュラム表を載せる。教育内容は、ソフトウェア・理論中心の論理的思考の充実を図る方向である。理系色が強いながらも、当時としてはバランスの取れた構成である。

表2：カリキュラム表

必修科目	情報理論、組合せ理論、計算の理論、情報測度論、情報解析学、数理計画法、計算機組織論、プログラム理論、人工知能、画像処理、データ構造、システム理論、情報科学概論、プログラミング概論、プログラミング演習、情報数学、情報数学演習、情報科学実験 I、情報科学実験 II、卒業研究
選択科目	情報代数学、記号論理学、数式処理、情報幾何学、確率情報過程、情報統計学、ソフトウェア方法論、システムプログラム、論理設計論、パターン認識、信号理論、情報ネットワーク、生体情報処理、数値解析、シミュレーション、情報科学特別講義、情報科学コロキウム

概算要求が通った後の学科立ち上げは、設置準備委員会が担った。この委員会が学科の主要メンバーを選考して、そのメンバーに学科運営を引き渡すようにして進められた。主要メンバーとして、理工学部の機械、数学、物理、電子の各学科から、稲村實、上原健、近藤弘樹、渡辺義明が教授候補として推挙された。また、助教授として寺本顕武、杉田洋、只木進一、掛下哲郎が学外から招かれた。さらに助手、教務職員、技官が選定された。なお、人事発令は初年度に一斉に行われたのではなく、年次進行に伴う定員増に従って順次行われたため着任時期にはずれがある。着任後まもなく稲村實が抜け、その空席を新井康平が埋めた。さらに講座増に伴う教員定員増に際して、林田行雄と林敏浩が着任した。

当初は学科の建物がなく、教員は各学科の部屋を間借りする状況であった。また学生が扱うコンピュータも寄贈を受けた古い機器を使ったりしていた。2年目の末に現在の理工学部7号館に当たる情報科学棟ができ、3年目の末には、教育用のコンピュータがレンタルシステムとして導入されて物理的基盤が整っ

た。設置当時は、充実しているとはいえない環境の下での教育であったが、教員、学生とも新学科の熱気を持っており優秀な人材を輩出できた。

「知能情報システム学科20周年記念によせて」

群馬大学大学院工学研究科

電気電子工学専攻教授

稲村 實

1. 情報科学科設立前夜

国立大学の理工学部は今では珍しくないが、旧情報科学科が設立された佐賀大学は国立大学唯一の理工学部をもつ大学であった。ここに他大学に先がけて情報科学科が設立される事になった経緯は、実はよく知らない。当時、情報科学科をもつ大学は東大と東工大・大学院のみで、共に理学系に設置されていた。すでに情報化社会という言葉が盛んに使われてはいたが、まだ国立大学はダイヤル回転式黒電話の使用が大半であり、情報化社会と言うには、その中身は質量共に貧しかった。他の国立大学でも情報工学科や情報工学部の設置は進んでいたが、一方、情報化社会とその技術基盤を支える理学的思考の堅固な情報科学基礎の強化が不可欠であり、急がれた。工学的柔軟さと数理的精密さを兼ね備えた学術の基礎がしっかりしていなければ、その上に築かれる事になる途方もなく大きな未来の情報技術社会を支える事など出来ないのは明らかであった。旧文部省も将来の情報化社会に向けて、その様な研究・教育拠点の充実を考えていた事は想像に難くない。この状況に先を読む抜群に能力の佐賀大学執行部が俊敏に反応し、一気に関連学科の学科主任を中心に設立準備へと進んだという事である。理学と工学の接点として上記の役割を期待されている情報科学科の新たな設置は、国立大学唯一の理工学部を持つ佐賀大学は特別に有利であり、非常に幸運な誕生であったと言えよう。

そんな訳で、私は学科新設のメドがついた時から参加したが、残るは具体的な教育カリキュラムの検討段階となっていた。すでに各学科主任を中心に教育の方向と概算要求用カリキュラム素案が出来ていたが、それは私の思い描いていた内容(例えば、「現代の遠隔計測技術」佐賀大学理工学部広報(ScienTech)、昭和63年3月号、pp.5-7)に全く一致するものであった。この時点で私は機械系学科に所属していたが、リモートセンシング画像処理を含む多次元画像処理を研究しており教授となっていたので、4月からの新設学科年次進行初年度設置分の第1講座教授として、まず私が情報基礎学講座に移動した。最終的には第4講座の情報処理学講座に移動する予定なので、それを前提に助教授の人を探した。

2. 情報科学科の新設と方向

まず情報科学の全体や情報処理学講座を考える上で、前の職場である東大・計数工学科の計測コースと数理コースの協調や研究・教育上の分担は参考になった。一見すれば情報と計測の関係はかなり遠いと思われがちだが、しかし事実は全く逆で、しかも互いに相手をよく知り、尊重しなければならない事を学んだ。この計測と情報処理の関係はしばしば GIGO と表現され、私はこれを次の様に学生に説明した。「計測工学と情報処理・情報工学との関係は、いわば漁師と板前の関係である。いくら腕の良い板前でも魚が無ければ料理はできない。また、魚があっても板前がいなければ客が希望する料理はできない。真においしい料理は、新鮮な良い材料を使って、適切に料理して始めて実現する。しかし、やはり材料（データ、それを得る計測手法）の良さが全ての基本である。これを GIGO (Garbage In, Garbage Out ; クズしか入れなきゃ、クズしか出ない) と言ひ、れっきとしたコンピュータ用語である」と。結局、東大・計数工学科から新しいセンシングシステムを研究している博士課程修了予定の寺本顕武氏を講師として迎えた。

新設初年度はまだ情報科学の建物はなく、私は機械系の研究室をそのまま、新任の寺本先生も機械系の一室を使わせて戴いての開設準備となった。私は機械系の卒研・修士の学生もそのまま継続担当させて戴いていた。まずは学科の建物の設計だが、新しいセンスで垢抜けたものをとという施設部の意気込みと若い寺本先生が共鳴し、色々と案を出し腐心の末、設計図が完成した。第1回入学生はまだ教養部におり、私はと云えば機械系での科目を分担しながらその他の雑務を処理していたが、ある事情が生じようとしていた。結局、私は第1回入学生に「情報科学概論」を講義したところで、残念ながら途中降板する事になった（「一度だけ見た不知火寮」、佐賀大学理工学部30周年記念誌、一歩みと想い一、P.265）。しかし情報科学の布陣は私以外に、数学科から上原健先生、物理学科から近藤弘樹先生、電子工学科から渡邊義明先生がいて、私の降板後の心配は全くなかった。私が情報科学科学生に1度だけ講義した「情報科学概論」は、上記 GIGO を理解して貰うべく、現代の環境情報収集技術とその情報処理法を例にとり、「現代の遠隔計測技術」の内容を図や写真を用いて概説した。

3. 佐賀大学「知能情報システム学科」の益々の発展に向けて

ご承知の様に、その後の20年間の変化は真に情報化時代に突入したと言える状況となった。大学の日常通信もダイヤル回転式黒電話から Fax による文書通信を経て、インターネット、携帯 i-モード、携帯テレビ電話、ワンセグ携帯へと秒刻みで進歩を続けている。高機能モバイル情報端末の氾濫している昨今からダイヤル式黒電話を使いながらも盛んに情報化社会と言っていた頃を望遠す

るに、「情報科学科」設立の頃は現在のモバイル情報化社会への胎動期であったかと思う。すなわち、芽を出す春に向けての準備期間であったと。そして今を花が咲き始めた春とするならば、これから実をつけ、収穫するという、実り豊かな真の情報化社会への歩みが待っている。機能の10%も使いこなしていない高機能携帯端末を1人1台以上ゆきわたったこの状況は、すでにその機能と密度において臨界点を超したとみられ、季節は春から夏へと変わりつつある様である。一方、どの技術でもそうである様に、IT技術においても携帯の出会いサイトなど、そろそろこの技術の負の面も出始めたが、これらの問題を克服し、IT技術を消化して進んで行くのも、また他の技術と同様であろう。

その後、佐賀大学情報科学科は「知能情報システム学科」と改称し、他大学でもこの20年間に情報学部、情報科学部、知能情報学部、社会情報学部、等の学部・学科が新設や改組で誕生したが、どの情報科学科もが佐賀大学情報科学科の様に恵まれた研究環境にある訳ではない。佐賀大学情報科学科は、今日まで優れた実績を積み重ねてきた理系数学・物理両学科からの絶大な支援がある分、その優位性は特別であり今後も変わらない。なぜなら、最近の情報科学研究の数理的テーマの例をみれば分かる様に、不規則信号論として確率解析、情報幾何学や多様体学習としてリーマン多様体・微分幾何学、カーネル学習として関数解析・再生核の理論、統計的学習として統計物理学、等々の数理的素養を必要とするが、佐賀大学にはこの分野の優秀な数学・物理専門家が学科内外に揃っており、知能情報システム学科は必要に応じてこれに対応できる強力な布陣の共同研究体制がすぐにも作れるからである。近年、フィールズ賞受賞のS. スメール教授も学習理論の研究に乗り出して話題になっているが、佐賀大学はこの分野でもリーダーシップをとる準備はいつでもできていると言えよう。その他、現研究室についていちいち詳細は述べないが、理工学部の精鋭スタッフが結集し、理工融合の良い協力関係の中にあるという恵まれた研究環境は、知能情報システム学科が今後も他大学に先駆けてさらに新分野へと躍進し、組織は小さくとも存在感のある先端研究拠点として輝き続ける事を約束しているもので、益々の活躍を心より祈念している。

プロフィール／1982年4月佐賀大学理工学部助教授着任(生産機械工学科)、1987年4月教授昇任、1988年4月情報科学科(新設)に配置換え、1989年10月群馬大学工学部(電気電子工学科)に転出。現在に至る。

情報科学科の時代(1988年度～1996年度)

「最新の知識・技術のみならず・・・」

林田行雄

平成5年8月、私は旧情報科学科に旧電子工学科から配置換えとなり、情報基礎学講座を担当することになりました。これは工学の分野から理学の分野の学生さんを受け持つことを意味すると同時に、新しい学科で最初に私の研究課題にチャレンジしてくれるのはどのような学生さんだろうか、期待が膨らみました。今日でも年度初めにはその気持ちは変わりません。果敢にチャレンジしてくれたのは、大学院修士課程に進学された馬場千香子さん、稲田孝君、毛利年孝君。（電子工学科・専攻を含めてこれまで私の手元を育ててくれた学生さん、すべてが記憶にあります、初年度の学生さんの記憶は鮮明です。）その時期、私はカナダで開催された国際学会に参加する機会に恵まれ、発表と同時に有名な通信会社を見学できました。会議室で会社紹介が行われたとき、斬新な画像がスクリーンに映し出されたのです。操作性、プレゼンテーション効果が著しく高い。これまで見てきたフィルムスライドではなさそう。話の内容もそこそこに、どのような投影機なのだろうかと目をきょろきょろ。暗闇の中でパソコン（PC）を操作している姿が見えました。PCを使っている？私もPCを利用していましたが、このような技は知りませんでした。機種を調べるとMacintosh。マウスを駆使した操作性はよいが、性能が劣るので、採用していませんでした。帰国して早速数台を購入、学生達と一緒に使い方を勉強しました。ソフトはMac版 persuasion です。私は persuasion が好きな単語です。何故？それは「説得する」という深い意味をもつからです。おっと、脱線しました。話を戻しましょう。

当時のMacintoshはCPU、メモリ、ソフトの関係からハングアップ（パソコン動作が停止すること）が頻繁に生じました。一言で言えば、実用にならない。つまり、フォーマルな発表会では発表時間に制限があるので、パソコンを再起動する時間余裕がないのです。それでも斬新な persuasion を用いて発表したいと学生達は主張します。そこで信頼性の向上策。PCを2台用意し、バックアップ体制を整えること。一言でいえば簡単ですが、聴衆の目前で切り替えを人手作業で、しかも限られた時間で行うにはチームワークが欠かせません。そこで、卒業論文や修士論文の発表練習と同時にバックアップ対策の練習まで必要になりました。他の研究室の学生からは、発表練習だけでも大変なのに、余計なことまでやっているのですねとコメントを受けました。しかし、学生達は我慢して、最後までやり遂げたのです。（バックアップも使いましたよ。）

これは今から15年前の話。最新の専門知識と技術、それだけに留まらないチームワークと persuasion の大切さを伝えることができたと思っています。

以来、その教育方針は変えていません。現在、プレゼンテーションはリテラシー教育の必須項目となっています。さて、20周年記念を迎える今日、私は最新の知識・技術のみならず、何を学生に伝えようとしているのでしょうか。

情報科学科設置当時の思い出

渡辺義明

私は、昭和 61 年の 1 月に電子工学科の助教授として佐賀大学に赴任しました。情報科学科設置の約 2 年前になります。何だか新学科設置のために赴任したようなタイミングですが、決してそうではありません。当時の電子工学科には、情報を専門とする先輩教員が 2 名ほど在籍していました。順当なら彼らが候補となるはずでしたが、当時は情報系学科の設置ラッシュがあっていた時期であり、相次いで他大学へ移動になりましたので、私に回ってきたものです。

佐賀大学赴任後しばらくして、情報科学科設置の作業グループに入るようにとの指示がありました。作業グループは、荒牧軍治先生を中心にして構成されていました。私はグループメンバー中でも一番の若輩者ですし、先輩教員のどちらかが候補だろうと考えていましたので、割りと気楽に発言して作文をできた記憶があります。カリキュラムや研究内容なども自分が担うことになると考えたらもう少し遠慮したものになったかも知れません。結局、書いた分の負担が自分に回ってきて苦勞するはめになりました。

何とか概算要求書を完成させ、これで終わりと思っていたところに、お前が行けという話になりました。その後もいろいろありましたが、結局のところ、年次進行による定員増に伴って設置 3 年目の春に移動となりました。

次の年には、学科長（当時は主任）を引き受け、最初の卒業生について就職担当も引き受けました。幸いにも、情報関連産業の好調時期と重なり就職状況は良いものでした。歴史のない新学科に、最初の年に入学してくるだけあって、現在と比べて強烈な個性の学生が多かった気がします。最近も各分野で活躍している様子です。

その後、学科設置の 4 年目には、大学院設置の概算要求を、また 5 年目には、定員増の概算要求を行い、またその間にも、学部の博士課程設置の概算要求や、教育用計算機システムの概算要求、さらに情報処理センターのシステム導入に関わる作業にも関わるなど、ほとんど毎年のように概算要求関係と格闘していた思いがあります。それが落ち着いたころから、情報処理センター長を引き受けたため、またもや概算要求との格闘を行うことになります。

忙しかったですが、やりがいのある時代でした。情報科学科設置当時は、汎用機の大規模システムが社会基盤を担う時代でした。その後、知能情報システム学科に改組された時期は、インターネットが脚光を浴びるようになる時期と重なります。20 年経って、我々は当時からは想像できない高度情報社会にいます。まだその変化・発展は止まる気配を見せません。社会の変化に合わせて、情報系学科がどのような教育研究を担うべきか、常に検討を重ねていく必要が

あります。確立していない発展している学問分野だから、苦勞も多いですが、魅力があるともいえます。ともに頑張りましょう。

情報科学科の頃

総合情報基盤センター 只木進一

私が佐賀大学理工学部情報科学科に来たのは、新井先生と同じ1990年4月です。1988年にできた情報科学科に、新井先生と私が着任して、4つの講座に教員が揃うことになりました。1990年の4月は、情報科学科の建物(現在の理工学部7号館)ができたところでもありました。私の部屋は、2階の一番西側の部屋でした。

建物は建って、本棚や机などの什器類はすぐに揃いましたが、ほかは何も無いのが実際でした。学科にコンピュータシステムが入って、ネットワークが使えるようになったのが1991年春でした。それまでは、コンピュータが無かったので、当時の情報処理センターへ出入りするようになりました。小さな汎用機とその専用端末があり、それを使って、書きかけ論文を書いていた。渡辺(健)先生がセンターの助手で、いろいろと教えてくれました。こういうことがきっかけで、情報処理センターの仕事にずるずると引き込まれていくことになったようです。

学科は、近藤先生以外の教授はみな若く、協力して学科を作っていこうという意欲が漲っていました。なにせ、前例というものが無いのですから、皆で協力していくしかありません。オープンな気風の学科の起源は、最初のこの時期にできたと思います。

1990年は、第一期生がようやく3年生になったところでした。学科には、まだ十分にコンピュータもネットワークも無かったのに、随分張り切っていた印象でした。情報技術もはじめの頃でしたから、何も無いところから道を切り開く感じで、それが彼らの生き生きした感じと関係があったのかもしれませんが。

私たち教員も、十分にコンピュータもネットワークもない学科で教育と研究を始めたので、学生諸君と同じで、手探りで道を開きながら進んでいきました。ネットワークの設定なども、教科書通りでは動かさず、随分と工夫しながらやっていた。そのころの経験が、今でも非常に役立っています。

「記録しておきたい思い出話」

岡崎泰久

今も理工学部七号館の建物の外壁にある銀色の『情報科学科』の文字が残っている通り、この建物が出来た当時の学科名は情報科学科で、ちょうどこの建物が出来て、引越しも終わった後に情報科学科にやってきました。

この新しい建物は1階の広いロビーと吹き抜けが印象的でした。現在はコンピュータ演習室を拡大したため、ロビーはほぼなくなってしまいましたが、以前はコンピュータ演習室の入口も現在のAV講義室の入口と同じ奥の位置にありました。

この広い開放的ロビーはイベントにもってこいでした。現在も年末に大掃除が行われていますが、以前は、掃除終了後に掃除が終わったばかりの情報科学科棟のロビーでスタッフはもちろん大掃除を行った学生も含め学科全体で忘年会を行っていました。玄関であるため、素通りできずにそのまま宴会に取り込まれるスタッフや学生もあり、なかなか盛り上がり楽しいものでした。昔はスタッフも若くて学生との年齢も近く、また、学生も元気のある者も多くいて、こうしたイベントのおかげもあってかスタッフと学生の距離も近く感じられたように思えます。

スタッフと学生が一緒になって楽しく過ごした玄関ロビーでの忘年会や、玄関前でのお花見は情報科学科時代の心に残る思い出の一つです。

杉町信行

私は平成6年（1994年）の夏に電子工学科（現電気電子工学科）からこちら（情報科学科：情報基礎学講座）に来ました。年度半ばの着任ではありましたが、林田先生が電子で指導されていた学生さんもいましたので、比較的すんなりと情報の学生さんとも打ち解けた気がします。当初の本学科の印象としては建物も新しく清潔で、学生さんものびのびと楽しく学生生活を楽しんでいるという感じでした。翌年（平成7年度）は3年次研修旅行を担当し、10月4日に久光製薬で医療用シップ材の製造工程などを見学後、読売新聞鳥栖工場で夕刊の印刷工程などを見学しました。平成8年は「理工学部30周年記念誌」が発行され、販売ノルマを達成するために、いろいろと苦勞しました。

コンピュータ演習室の怪

前田明子

キミが消えた
昨日？ 今日？
何の前触れもなく
消えてしまった

またひとり消えた
ひとり、ふたり、
半年で数十人
みんな・・・何処へ

この部屋は何なんだ
ヒトが忽然と消えてしまう
いつ？ どうやって？
いったい・・・何故？
スリッパだけ残されて

大変だ
早く何とかしないと
このままでは・・・
そして・・・
誰もいなくなってしまう・・・

「コンコンコン」
「えっ？」
「もお、掃除サボって何やってんのかと思ったら」
「うっ」
「誰もいなくなるわけないでしょ！」
「うう」
「さあ、さっさとこのスリッパの山、靴箱に戻して」
「はい！」

知能情報システム学科20年を振り返って

寺山康教

この学科のスタッフに着任した当時は情報科学科という名前でした。そのころは Sun4 というエンジニアリング・ワークステーションという位置づけのミニコンとパソコンの間くらいのイメージのコンピュータを使用して計算を行うのが先端である感覚が強かったと思います。そのころの計算機はとても高価で端末からログインしてプロセスの優先順位などを気にしながら計算機を使っていました。結果が出れば従来の端末であるパソコンにダウンロードしそれを画像や数値データとして整形し研究を行っていたという記憶があります。そのころのパソコンは PC9801VM という当時は PC98 シリーズの最新 PC でしたが衛星画像を処理するにはやはり遅すぎる速度でした。なんと、512 x 400 画素の画像を 16 階調のグレースケールで表示させるのに 40 分という時間を要する程度の能力なのです。そこで、個人で勉強した機械語プログラムなどを駆使して一旦書いた画像を次回に高速で表示するためのコードなどを書いたりもしました。また、そのころはメモリも少なく、PC 購入時に入っていたハードウェアマニュアルを読み漁り、使用していないメモリ番地を画像表示や処理のために強制的に割り当てたりしたこともあります。OS に関わる番地を間違っていると稼働させたら PC が落ちるなどの経験もやりました。面白いことにこんなことをやっても単に画像を表示するという作業だけで研究は一向に進まなかったりするのは、PC9801VM というパソコンが来るまではどうやって衛星画像を処理していたかという `.:@#*` などのキャラクタ文字を用いてプリンタにプリントアウトしていたのです。で、それを大学の廊下の壁に張り付け佐賀大学のグラウンドはこの辺だから、x、y が何画素目だなどという最先端の衛星データでありながらすごくレトロな方法で画像の処理作業を進めていたのです。現在ではとても考えることすらできないと思いますが、ニコニコ動画などで AA (アスキーアート) を使用して TV のキャラクタや映像を作る職人もいますがそれがネット上では讃えられていたりもします。昔やっていた作業がそのままここでは生かされているわけです。そう考えると昔も今も計算機に関わる作業や処理する内容は 20 年たってもそう変わっていないと思います。つまり、以前は手作業で行っていたことが計算機のおかげで手間を減らし高速で莫大なデータを扱うことができるというだけなのです。よくコンピュータが発展するとよりよい幸福な未来を想像しがちですが、やってることは昔とそう変わりません。メール、WEB などにしても昔はがきや手紙、雑誌や印刷物に情報媒体が取って代わっているに過ぎません。要は情報というものをいかに効率良く整理し、処理し、人に有効な情報として結果を評価して提示するのは計算機でもなんでも

なく人間の思考であり考え方であることは今も昔も変わっていないと思います。ただし、昔は絶対にできなかったことが計算機の高速化、大容量記憶化によってできるようになった分野や物事も確実に存在します。情報に関わるものを教える人間として、特にこの学科の学生さんたちには情報分野の普遍的な考え方とその先の昔では絶対にできなかったことのアイデアや研究を少しでも伝えていくことができたらいいなと思いつつ学科20周年の言葉と挨拶としたいと思います。

記録しておきたい思い出話

田中久治

知能情報システム学科、20周年おめでとうございます。

1990年の4月からこちらに勤務しています。昔の話をとのリクエストですので、昔あったもので、なくなったものについて思い出してみたいと思います。

まず建物についてですが、7号館の1階ロビーがコンピュータ演習室の拡張に伴いなくなりました。拡張前はコンピュータ演習室とAV講義室の入り口が1列に並んでいて、その前に、椅子やテーブルが置かれて、学生の控室として利用されていました。冬の大掃除が終わったあと、慰労会を兼ねた忘年会が開かれていて、スタッフと学生たちが一緒にきれいになったばかりのロビーで、飲み食いしていました。学生にとってはスタッフをよく知る絶好の機会だったのではないかと思います。また、謝恩会の2次会にもロビーが使われていたように覚えています。

ほかに、3階の301室が、大学院課程ができて数年間は研究室に関係なく大学院生の控室だった記憶があります。研究室単位ではなく大学院生全体で一つの部屋を共有するのはめずらしいと思いますが、控室があったところは学生間の横のつながりが非常に強かったと思います。

教育用計算機システムも、プログラミング演習や学生実験で使用する端末がコンピュータ演習室からなくなりました。最初の1年間は学生実験に8inch(2D!)のフロッピードライブを持つPCが使用されました。翌年から4年間はMacintosh classicがあり、その後、8年間のX端末を経て、コンピュータ演習室から端末が姿を消しました。端末が姿を消したとき、コンピュータ演習室は広い部屋だなと思ったのですが、学生たちが授業で使用していると、やはり狭いですね。

秋に行われていた研修旅行もいつのまにか行われなくなりました。まだ、なくなったものがあると思いますが、これ以上思い出せませんのでここまでにしたいと思います。

大阪大学大学院理学研究科
数学専攻
杉田洋

このたびは知能情報システム学科が 20 周年を迎えられたとのこと、まことにおめでとうございます。

私は 1989 年 4 月に前身の情報科学科に赴任しました。当時、同学科の一期生は教養部 2 年生で、翌年に専門課程に入ってくる彼らを迎えるべく本格的な準備が始まっていました。

学科を立ち上げて行くことは連日連夜の会議でとても大変でしたが、同時にとても充実した時間でした。

情報科学科は理工学部の中でも本当の意味で理工が融合した形で実現した学科だったこともあり、他学科の皆さんのご支援が甚大でした。情報科学科には新しい校舎が与えられることになり、設備も最新のものが整えられました。会議もすべてが前向きな議題が満載であり、夢を実現しているという実感を伴ったものでした。

そういうふうでしたので、情報科学科の皆さんにとは非常に密接な時間を過ごすことができました。私としてはとても得ることが大きかったのですが、一方、数学科出身の若造はとても無理ばかり放言して、皆さん、とくに教授の皆さん、数学の小倉幸雄先生には多大なご迷惑をおかけしたに違いありません。この場をお借りしてお詫び致します。

そうそう、計算機センターで働いておられた渡辺健次さんにも大変お世話になりました。

計算機のことをよく知っている学生さんだなあ、というのが私の最初の印象でした。大変失礼しました。その方が学科長をされているのですから、時間がたったんだなあ、と実感しております。

研究面では、残念ながら当時の私の専門は「無限次元確率解析」という分野で、ほとんど情報科学とは接点を持っていませんでした。それでも寛容にも当時の教授陣は私に好きな研究を続けさせてくれました。今、思い出しても最良の研究環境を頂き、とても感謝しております。もつとも、教育面では当然のことながら自由なことを教えるわけに行かず、講義および 4 年生の卒業研究は情報科学の内容を勉強してそれを多く盛り込んだものを行っていました。不思議なもので、一期生のことは大変よく覚えています。私は勝手に分からず、彼らにとっても難しい授業をやってしまったと思います。そして彼らからもたくさんのことを学びました。

その経験は佐賀大学を去ること 15 年の年月のうちに私の研究にも大きな影

響を及ぼし、私はいつしか確率論と計算機科学の境界領域、とくにモンテカルロ法について研究成果を挙げるに至りました。(ついでに宣伝ですが、モンテカルロ法に関心のある方は、ぜひ、

http://homepage.mac.com/hiroshi_sugita/mcm.html

を訪れてみて下さいませ。)

私は1992年10月に佐賀大学を去ることになるのですが、その後、全国の大学が教養部の廃止、大学院重点化、それに独立法人化と改革の嵐に見舞われ、教職員が(おそらくは学生たちも)大学の行く末を見定めることのできない時代となりました。情報科学科も改組され、知能情報システム 学科に至った背景には、様々な経緯があったことであらう。

末筆ながら、皆様のご健康と、これからの知能情報システム学科のますますのご発展をお祈り申し上げます。

大阪教育大学教養学科
数理科学講座
町頭義朗

佐賀大学工学部知能情報システム学科20周年、おめでとうございます。

わたしは、平成4年の10月から平成10年の3月まで、報科学科数理情報学講座の助手として、お世話になりました。当時は情報科学科が新設されたばかりということに加えて、大学は改組の真最中で、非常にバタバタしていました。

しかし、煩わしい思いをすることなく、落ち着いて研究できたことは、諸先生方のご尽力のおかげと、感謝しております。

就職して最初に教壇に立った時の緊張は、今でも忘れられません。あの頃の学生さん達は、今頃どうしてるのかなあと思い出すこともしばしばです。

時々、佐賀駅から大学まで歩きながら、数学のアイデアを考えていたこともありました。今は、あの頃の街の感じとは、違っているのでしょうか。

5年半という短い間でしたが、その間の平成6年に、夏の全国高校野球で佐賀商業高校が見事に優勝して、佐賀全体が非常に盛り上がったのも、いい思い出です。また、皇太子殿下ご夫妻がお泊りになっている日にホテルニューオータニ佐賀のビアガーデンで、ゼミ生と飲んだことも強く印象に残っております。

最後になりましたが、知能情報システム学科の益々のご発展と、お世話になった皆様方のご健勝を心よりお祈りしています。

知能情報学科での思い出

山口大学大学院理工学研究科
情報・デザイン工学系学域
松藤信哉

佐賀大学工学部知能情報システム学科が前身である情報科学科から数えて20周年を迎えられたとお聞きしました。もうそんなに年月が経過したのかと言う驚きと共に、佐賀での出来事や懐かしい風景が懐かしく思い出されます。佐賀に立ち寄る機会がなくて、様子が分かりませんが、佐賀大学もずいぶんと変わったのではないかと想像します。

本学科創立年の夏頃から情報科学科のスタッフに加えていただき、約14年間お世話になりました。ご退職されました近藤弘樹先生を先頭にスタッフ全員が、一同に、理想とする学科を目指して、頑張っていたのではないかと思います。スタッフの方々がどのような時期にどのように入ってこられたかは明確に記憶しておりませんが、だんだんと賑やかになり、学生を受け入れる体制が整ってきたことを実感しておりました。私にとっては、若い学科であったこともあり、いろいろなことが新鮮で、居心地の良い職場でありました。

研究では、現在の第3研究室に所属していきまして、渡邊義明先生の下で、自由に研究させていただきました。アルバムには、好き勝手に海外出張させていただいた写真でいっぱいです。ゼミにおいては、掛下哲郎先生とも活発に議論させていただきましたことは、私の研究の財産になっております。今、考えると、とんでもない自由な時間と貴重な多くのご意見をいただきましたことに対して、この場を借りて、改めて先生方に深く感謝する次第です。

現在、機械システム工学科に移られたようですが、寺本顕武先生が設計されましたりっぱな学科棟のロビーでは、何か催し物がある時には、パーティ会場に変わり、学生と共に、和気藹々、酒を酌み交わしていたことを懐かしく思い出されます。東京で卒業生・修業生と飲む機会がありますが、スタッフと一緒に飲んだことは、良い思い出になっているようでした。

学科棟は、今では、当たり前となった全館禁煙であり、ある意味、先見の目があったといえ、喫煙者であった私にとっては、大変な規則でした。玄関前の喫煙場所で、暑かろうが、寒かろうが、ほとんど毎日、教職員の中で私以外唯一の喫煙者であった寺山康教先生と一緒にたばこを吸いながら、雑談しておりました。この時間は、他のスタッフの方とも研究や仕事の話をしたり、学生の質問に答えたり、訪れた企業の方と情報収集したりと、貴重であったと言い訳しておきます。今では、喫煙する不便さも手伝い、タバコを止めた軟弱者でもあります。

昨年、新カリキュラムの調査のために、当学科のホームページを訪れておりました。カリキュラムは、筋が通った内容で、きちんと考えられているのが分かります。他大学の知能情報系と比較しても、より充実しているように思えます。また、新しく、実験内容も変更されており、学科スタッフの皆さんが、現状に合わせて、学生にとってより良い学科になるように、尽力されているなあと感じています。今後、益々、スタッフの皆さんが一層の発展をされますように、心より願っております。

教務のイロハはここで学んだ

香川大学図書館・情報機構
総合情報センター
林敏浩

みなさん、ご無沙汰しております。香川大学の林敏浩です。現在、図書館・情報機構の中の総合情報基盤センターに所属しています。図書館員になったわけではありません。現在の部局では、全学の各種サーバやネットワークのお世話をしています。また、香川ということで、うどん三昧な生活になっています（笑）。

平成6年に大学院博士後期課程を修了して、ラッキーにも講師として佐賀大学工学部に赴任できました。当時の学科名は情報科学科でした。講座は当時、情報基礎学講座、現在の第1研究グループでした。平成16年7月に香川大に異動したので約10年間、佐賀大学でお世話になりました。その間に、助教授（准教授）に昇進したり、学科名が知能情報システム学科に変わったり、さらには世紀も変わりました。

今回、20周年記念誌に寄稿するに当たり、何を書こうかなあと考えたのですが、やっぱり、教務委員の話かなあと思いました。と、言うか、私が書くとなるとこれしかないでしょう（笑）。佐賀大での10年間のうち6年間、学科教務委員としていろいろやったなあという思い出が残っています。赴任の翌年に初めて教務委員になったのですが、なぜか、全学教務委員というおまけがついてきました。教務委員会で、「講師が全学教務委員でいいのか？」というご批判もあったのですが、なんとか2年間の任期をこなしたのを覚えています。と、言いながら何をしたかはあまり覚えていないのですが、全学教務委員会に時は、理工学部教務委員長の影に隠れて、「全学的な調整は難しいなあ」と思っていました。その後、再度、教務委員が回ってきたのですが、連続4年の長期にわたり教務委員をしました。この時は、新カリキュラム検討、教科「情報」の免許のための課程認定、JABEEの検討と、頭を使わないといけないことばかりだった記憶があります。

私にとっての佐賀大学時代は、教務ばかりやっていたと言ってもいいと思います。というような書き方をすると、「教務ばかりさせて」と嫌味を言っているように聞こえますがその通りです。と、言うのは冗談です（笑）。実際は、教務委員をしたおかげで大学の仕組が学科だけでなく、学部、全学とよくわかりました。さらには規程文書の作成方法など、学術論文以外のドキュメンテーションの勉強にもなりました。また、教務の様々な対応のための事務方との連

携の仕方も大変勉強になったと思います。教務委員の6年間は、結果としてきつかった分、教務を中心にいろんなことを効率的に知ることができました。苦労しないと勉強にならないということでしょうか。さらには、教務委員時代は、結構失敗もしており、質の高い仕事をしないといけないという反省もよくしました。また、4年間連続の教務委員時の後半では、慣れによる失敗も経験しており、ここには書けないような貴重なドキドキな経験もたくさんしました。

ところが、現在の部局は教務関係の仕事はいつさいありません。香川大学では、工学部併任教員として教務関係タスクはありますが、教務委員は絶対回ってきません。それはある意味、とてもうれしいことなのですが、と、すると佐賀大学の経験は意味がなかったかということとそんなことはありません。特に全学的な調整の仕方や、各種文書作成の方法など佐賀大学時代に得たノウハウを総合情報センターの仕事の中でフル活用しているといえます。また、香川大学に赴任してから約4年、だいぶ慣れてきた分、その慣れによる失敗に注意しないといけないと、最近よく感じています。これも佐賀大学で得たノウハウです。

そろそろ、まとめに入ります。学科の思い出を書こうと思ったのですが、結局、教務の思い出ばかりになりました。本当は教務の思い出で書きたいこともあるのですが、まだ、書くには早すぎる話も多いように思います。これらについては、ほとぼりの冷めた10年後の30周年記念誌で書かせていただければ思っていたりします。最後になりますが、「教務のイロハを学んだ」と題目に書きましたが、本当は、佐賀大学で教務のニホヘトくらいは学んだなあと思っています（笑）。

情報科学科与太話

佐賀大学総合情報基盤センター

松原義継

この度、情報科学科(現知能情報システム学科)が20周年を迎え、誠にうれしく思います。今回、私が情報科学科に在籍していた1990年代の主に前半について与太話をさせていただきます。

1 学科との出会い

1.1 経緯

私は、元々は佐賀大学工学部物理学科の学生であり、佐賀大学に入学した年は1987年でした。入学当時、工学部の電気電子棟から西側一帯はまだグラウンドであり、体育系サークルがそこで練習に励んでいました。私自身は、パソコンと自転車が好きな普通の学生でした。

1990年、私が学部の4年生の時、その運動場内の一角に突如として4階建ての建物が建設されました。自分はそれを見て「あれは何だ?」と、研究室から不思議そうに見ていました。そう、それが情報科学科の建物でした。

卒業後の就職先の1つとして、国家公務員試験を受けたら合格して、官公庁からの求人案内を見ていたら、偶然佐賀大学がありました。人事の方に仕事内容を訪ねたら、なんとその情報科学科でのコンピュータ技師でした。

卒業前に情報科学科の建物に入ってみました。大学内で新築の建物なんて初めて見るし、しかも玄関ロビーは2階まで吹き抜け、AV講義室には様々な機器が設置してあるし、他の学科とは明らかに異なる空間でした。私は「なんて新しい作りなんだ!」と驚いたものです。ある部屋の中には、パソコンとは明らかに異なるコンピュータが設置してありました。それはワークステーションなのですが、当時の私はパソコンしか知らなかったため、まさに別世界でした。

後で分かった話なのですが、情報科学科そのものは1988年にできたにもかかわらず、1990年までは学科としての建物がなかったのです。情報科学科の学生さん達は、建物ができるまでは数学科の教室を使っていたとのことでした。

1991年4月1日、佐賀大学の学生から佐賀大学の職員となった私は、情報科学科のスタッフとして学科と関わることになりました。この年は、1期生が4年生となり、学科として初めて卒業論文に取りかかるのでした。

1.2 スタッフの印象について

1991年時点において、世代が1つ上であった近藤弘樹先生を除いて、教授は40歳代前半、助教授以下は全員40歳未満でした。他学科とは10歳以上若いと思われる構成に驚きました。情報という分野自体の新設だったためか、他分野から若い人たちが集まった寄り合い所帯であったことは確かです。これが明確に分かるのは各スタッフの服装でした。理学系のスタッフの服装は普段着、工学系のスタッフのそれはスーツであり、服装を見れば出自がおおよそ理解できる状態でした。出勤の服装は「自由で良い」とのことだったため、自分は今まで通り普段着で出勤しました。学科としての性格はまだ真っ白の状態であり、これから学生さん達と一緒に形作っていくのでした。

1.3 所属講座について

私が配属になった講座は計算機科学講座。教授は、渡邊義明先生。渡邊先生は当時は40歳代前半であり、自分が教授というモノに抱いていた「教授の年齢は50歳代以上」というイメージがガラガラと壊れたことを覚えています。助教授である掛下哲郎先生は20歳代後半。助手である松藤信哉先生は30歳代でした。仕事初日、現在も変わっていない渡邊先生の部屋に集まって、自己紹介と仕事内容の説明を受けました。この時、私は非常に緊張していたことを覚えています。部屋は松藤先生と同じ306号室であり、2000年に学科を離れるまでその部屋にいました。

1.4 1期生に対する印象について

私の学生時代の学籍番号は87s2**, 学科の1期生の学籍番号は88s4**であり、その差はわずか1年でした。ある学生さんとは同い年、別の学生さんとは私が年下です。立場上、私はスタッフ、相手は学生さん達でしたが、年齢上の差がほとんどなかったため妙な感覚でした。コンピュータは中学生の時から興味があったため、もし私が大学受験で一浪していれば、もしかしたら私は情報科学科の1期生だったかもしれません。そのためか、相手が学生さんという感じはあまりしませんでした。見方を変えれば、私は「学生の延長」等と揶揄されそうですが、その当時の私においてこれを否定することは難しいでしょう。

学生さん達から私がどう見えていたのかは、分かりません。学生さん達の私に対する話し方から考えると、学生さん達には戸惑いや割り切りがあったようです。今思えば、それはそれでおもしろかったと思います。

1.5 卒業研究について

学科として初めての卒業論文のため、スタッフの方々も学生さん達も試行錯誤だったと思います。学生さん達の部屋は、基礎講座(現5研)と計算機科学講

座が402, 405号室の共同利用, 数理講座(現2研)は403号室, 処理講座(現4研)は404号室でした。各先生方の経歴がずいぶん異なっていたためか, 各講座での取り組み方がかなり異なっていました。5月のゴールデンウィーク過ぎに集まってゼミが始まったと思います。計算機構座では, 基本的に各先生が1, 2週間に1回のペースで担当の学生さんに対して打ち合わせを行い, 1ヶ月に1回のペースで全員が集まって, 講座としてのゼミが開かれていたと思います。

計算機構座の学生さん達は, ゼミの雰囲気, 特に作文チェックに慣れるのにずいぶん苦労していたと思います。どんなにゼミ資料を書いて発表しても, その資料は赤ペンチェックだらけであり, 場合によっては先生方からのツッコミにより後日発表し直しとなり, 学生さん達が頭を抱えていたと思います。夏休み前までは, 卒業研究のゼミというよりは, 発表と作文のゼミという印象が強いです。この付近は, 現在も同じかもしれません。

あれよあれよと正月になってしまい, 正月を過ぎると, 学生さん達は卒業論文執筆のために学科の建物内に事実上住んでいる状態になりました。この当時は, パソコンは高嶺の花であり, 個人で所有するのは大変です。学生さん達が自宅で自前のパソコンを使って卒業論文を執筆していた記憶は, 私には全くありません。学生さん達は学科に設置しているパソコンやワークステーション上で, 文章組版ソフトウェアであるLATEXを使って論文を執筆していました。

この頃, 私は講座のメインのワークステーションにアラームをセットしました。深夜00:00には大時計, 朝07:00には鶏の鳴き声でした。卒業論文執筆中は, それこそ徹夜して執筆することになります。学生さん達が生活リズムを崩して体調不良にならないためにアラームをセットしたと思います。学生さん達からの話だと, 大時計が鳴ったら研究室内で寝て, 鶏が鳴いたら起きていた事もあったとのことでした。

卒業論文の締め切りが近づいてきたら, 私はお茶菓子を差し入れたり, なぜかこの時期になるとパソコンが壊れて修理したりと, 何かと世話をしていました。そうこうしていると締め切りとなり, 卒業論文発表の練習です。今でこそ, プレゼンテーション用ソフトウェアとプロジェクターがありますが, この当時はそのような器用な物はありません。OHPシートに印刷して, 1枚ずつ手でシートを入れ替えていました。発表の練習の中に, いかにか効率よくシートを入れ替えるかがあったと思います。卒業研究発表を終え, 卒業式を迎え, 学生さん達が卒業証書を受取り学科を去って行くのを見て, 感慨深いものがあったことを覚えています。

この時期は, バブル経済が終わった年でしたが, 就職活動は絶頂期でした。就職難という言葉は, この時期にはなかったはずですが。学生さん達は, 企業に就職したり, 公務員や学校の教諭になったり, 珍しいところではレスラーにな

った学生さんもいました。

1.6 大学院生について

翌月1992年4月には、修士課程の学生さん達が一気に増えたため、院生室が301号室にできました。進学した女子学生の一人がこのタイミングで結婚して、その名字が変わってしまい、非常に驚いたことを覚えています。それ以前にも修士課程の学生さん達はいました。但し、他学科から先生方と一緒にほんの数人移動したのであり、自前はこれが初めてになります。この当時は、博士課程自体がなかったため、博士課程の学生さんはいません。最初の数年間は各講座用の院生室はなく、大学院の学生さん達は全員301号室に同居していました。講座間の壁が全くない状態であり、講座間交流という意味では、こういうのも良いかなと思いました。同年5月には、大学院の学生さん達とスタッフが一緒に、現在は6号館のある場所でソフトボールをしました。

大学院生ともなるとゼミは慣れたものであり、卒業研究程のペースではないにしろ時々行われた大学院生の講座ゼミの時は、卒業研究の学生さん達相手にお手本を示していました。

同時に、大学院生ともなれば、学会での研究発表があります。私自身、学会に行った経験がなかったために、大学院の学生さん達と一緒に発表練習したことがあります。

1993年には修士論文の発表が初めて行われました。大学院に進学した1期生は、ここで学科を去ることになりました。この頃は、発表のためのタイマーとして、自分が作ったパソコンソフトを用いていたと思います。最初の2,3年間は、とにかく何かと試行錯誤だったことを覚えています。

1.7 その後

年末の大掃除後の宴会や卒業式後の宴会は1Fロビーで行われたことがありました。1回だけですが、「卒業記念ライブ」と称して学生さん達がAV講義室に演奏機材を搬入してライブを行ったこともありました。

5年、6年と時間が経つと、さすがに仕事に慣れてきて、学生さん達が行う事を割とクールに見ることが出来るようになってきました。卒業論文や修士論文のネタとして、ウェブブラウザやJavaを用いたモノが出てきたし、学生さん達との年齢差が開いてきたこともあり、時代の違いを実感してきました。この頃における、学生さん達から見た私は「28歳前後かなあ。年齢不詳」というイメージだったことを覚えています。

2000年、私は事情により総合情報基盤センター*9に移り、学科との関わりは一部大学院生以外とはなくなっていました。この文章を執筆している2008

年において、学生さん達との年齢差は20歳前後になり、親子に近い差になってしまいました。情報科学科の学生さんが大学教員になったりして、さすがに時代が違います。

1.7.1 仕事を振り返ってみて

大きく見て、1年目は私自身が仕事に慣れることが重要であり、目の前にあるコンピュータをいじっては壊してました。当時は業務でネットワークを使うことは少なかったため、おおらかな時代でした。現在のように業務としてネットワークを利用することが当然の時代だと、コンピュータを壊すと大変なことになります。コンピュータのブラックボックス化が進んでおり、コンピュータをハードウェアとソフトウェアの両面からいじり壊すことが難しくなっていることも大きいです。

仕事上で、コンピュータを壊すくらいにいろいろ弄ることができたり、ソフトウェア開発ができたことは、今の自分の仕事にとっては大きな収穫です。ネットワークサービスに不調が生じた場合の原因追及に必要な基礎ノウハウがこれで養われたと思います。ソフトウェア開発は、現在のウィンドウプログラミングや3Dグラフィックスの時代においては、私のソフトウェア開発力はローテクの部類に入ってしまった。助かっているのは、ハードウェアとソフトウェアの基礎動作原理がまだ変わっていないため、まだなんとかかなっていることです。これも時代の流れだと思います。

2 1990年代の学科のネットワーク環境について

ここでは、1990年代の主に前半における学科のネットワーク環境を回想します。昔の話のため、知らない製品名や記憶違いがあると思いますが、ご了承下さい。

2.1 1990年代前半

1990年代前半までは、日本のインターネットの黎明期です。私が学科に就任した1991年は、インターネットの商用利用は全く記憶にありません。ネットビジネスという言葉は、5年程以上先の話です。その当時の私が抱いていたインターネットのイメージは、当時パソコンの世界で流行っていた電話回線を用いたパソコン通信の高級版でした。「私の目の前にあるネットワークケーブルの遙か先は、太平洋の向こう側の端末」ということに実感はまだありませんでした。

ウェブブラウザなんてないし、コンピュータと言ってもUNIX系のワークステ

ーションや、NEC 社製独自のPC-9800 シリーズもしくはApple 社製のモノクロ画面のMacintoshでした。現在一般に言われるところのパソコンは、まだ学科にはありませんでした。

2.1.1 最初の環境

学科にネットワークシステムが導入されたのは、建物ができた1990 年です。学科内のネットワークの通信速度は10Mbps であり、そのケーブルの規格は10Base-5 といって、現在のケーブルとはずいぶん違いました。もしかしたら、天井裏にそのケーブルがまだ残っているかもしれません。

私が学科に就任する前は、学生さん達はNEC 社製のN5200 シリーズを演習用に使っていたそうです。私は、1F の倉庫に山積みになっていたN5200 シリーズは見ていますが、実際に作動しているのは見たことがありません。

1F の演習室に設置されていた演習用コンピュータは、Apple 社製のMacintosh Classicだっと思います。それらは、AppleTalk と呼ばれる独自の規格でネットワークを構成していました。演習室のネットワークから学科外へのアクセスは、まだできなかったかもしれません。

3F のサーバ室には、学科の中央コンピュータが設置されていました。ホスト名は、仏教における釈迦の名を取って「shaka」でした。人の背丈程もある大きなコンピュータでした。確か、中古の住宅1 軒を購入できる程の値段だったと思います。

あと、5,6 台程ですが、当時最新鋭であったNeXT Computer 社製のNeXT Cube がありました。当時のコンピュータ環境においては、NeXT Cube は抜きん出た先進性を持つコンピュータであり、私はこれでオブジェクト指向ソフトウェア開発を学びました。現在は、この会社はApple 社に吸収され、OS の機能だけがMacOSX の一部として生きています。

2.1.2 各講座の構成

各講座を見ると、ワークステーションを主体とした構成でした。数多く導入されていたのは、当時のワークステーションはSun Microsystems 社製のSun SLC. その他機の横に置く少し大きなワークステーションや、先の「shaka」がありました。

ネットワークにつながっていたワークステーションには、識別用のホスト名が付けられており、その付け方は講座によって特徴がありました。当時は講座数は4 つであり、それぞれでの付け方は、基礎講座(現5 研) が川の名前、数理講座(現2 研) が数学者の名前、計算機科学講座(現3 研) が旧約聖書上の人物名、処理講座(現4 研) が山(軍艦かも?) の名前、でした。

2.1.3 ワークステーション

Sun SLC は白黒モニター一体型の製品であり、ワークステーションにおける価格破壊商品だったと記憶しています。それでもパソコンよりずっと高価な物です。

この頃は、ワークステーションのモニターは白黒であり、カラーモニターは高級品であり高嶺の花でした。

メモリ容量は8MB(メガバイト) もしくは16MB だったと思います。この頃のメモリは、1MB 当たり1 万円以上したと思います。現在のようにGB(ギガバイト) 単位のメモリが数千円単位の時代ではないため、ソフトウェア開発におけるメモリ使用量の節約は重要な課題でした。

ハードディスクは、現在のパソコン本体くらいある大きな物であり、確か40MB の物が100 万円近くしたと思います。性能優先の騒音がひどいハードディスクであり、私はこれを契機に性能と騒音のバランスに興味を持つようになりました。

Sun Microsystems 社のOS はSunOS と呼ばれる物であり、同社における現在のOSであるSolaris の前身になります。驚いたのは、OS のメディアです。なんとテープでした。それはカセットテープを数倍大きくした物であり、テープからデータを読み込ませるのでした。1980 年代前半におけるパソコンソフトのメディアがカセットテープだったのですが、まさかここでテープを見るとは思いませんでした。

2.1.4 システムセットアップ

この当時のSunOS のセットアップは、パソコンのOS のセットアップとは桁違いに大変でした。現在だとOS が自動的に行ってくれる作業を、この当時は全て手動で行っていました。一番戸惑ったのは、全てのデバイスをファイルとして扱うという概念、そしてハードディスクにパーティションを切るためにセクタとシリンダを手動で計算する必要があったことです。

現在も利用されているEmacs, GCC, X-Window, TeX 等のフリーのアプリケーション群までセットアップするのに、1 週間程かかったものです。現在だと、UNIX 系OS におけるアプリケーション群もパッケージ化が進んでいます。でもこの頃はソースコードからその都度コンパイルでした。UNIX 系OS 同士の間でその構成が微妙に異なるため、コンパイルエラーが起きることは当然の状態でした。コンパイルエラーが起きる度に、原因を調べてソースコードを手動で修正していました。特に、TeX はその構成ファイルが多すぎて、綺麗にセットアップできるのに、ずいぶん試行錯誤しました。

このセットアップの苦勞は、今でも役立っています。ソフトウェアのパッケージ化が進んだ反動として、セットアップ時にトラブルが発生した際に、その原因の追及が難しくなってきました。もし、フリーのアプリケーション群を扱う機会あるならば、ソースコードからコンパイルしてセットアップすることにより、システムの内部の一端を見ることを勧めます。

2.1.5 パソコンにおけるディスク

時代的には、パソコン用ハードディスクの普及期であり、最初から内蔵しているパソコンはほんのわずかでした。容量は、20MB とか40MB だったと思います。金額は、十万円以上はしたでしょう。

そのため、フロッピーディスクを主体としていました。フロッピーディスクの大きさは、5 インチであり、数年後には3.5 インチに小さくなりました。その容量は1.2MB でした、ちなみに、私より前の世代の方々は8 インチの360KB といった物だったらしいです。

ちなみに、USB メモリディスクなんて全くありません。なぜなら、USB 自体がこの世にまだなかったからです。

2.1.6 X 端末

ワークステーションには、X 端末と呼ばれるX-Window*10用のダム端末を複数台設置していました。このX 端末とワークステーションをネットワーク経由で接続して、複数人がX 端末経由で1 台のワークステーションを同時に使っていました。

2.1.7 ネットワークサービス

1992 年頃には、学科にDNS はあったと思います。その基礎原理は単純ですが、もしDNS がなければ、世界に存在する数知れないコンピュータのIP アドレスを自前で覚える必要が出てきます。そういうこともあり、自分はDNS を高く評価しています。

電子メールは、就任当初からありました。電子メールの利便性は、今も変わることなく続いています。というか、まさか私がこの電子メールに関して現在あれこれ仕事をすることは思っていませんでした。電子メールの基礎技術は今も変わっておらず、その単純で融通が利きすぎることが、大規模サービスを構築する上での難物になったりします。

同時期には、ニュースグループと呼ばれる現在の掲示板の前身とも言うべきモノがありました。サービス内容は、掲示板とほぼ同じです。テーマ毎に専用のグループの一覧があり、そこにある投稿記事を読んだり、記事を投稿したり

してました。但し、この頃は、営利行為はまだ禁止です。フリーマーケット程度の個人売買のグループはありましたが、そこまででした。現在だと、ネットビジネスが当然となっていますが、当時それを行ったら怒られます。

2.1.8 インターネットの商用利用

1994 年になると、インターネットの商用利用が可能になったと記憶しています。インターネットの商用利用については、その当時はたった数年間でインターネットの環境があんなに変わるなんて 全く思っていませんでした。これから先数年間は、私はインターネットを取り巻く環境の激しい変化に振り回されることになりました。

2.1.9 パソコンの変化

インターネットの商用利用解禁の1 年程前1993 年になると、現在のパソコンがDOS/V機として学科に入ってきました。私が所属していた講座でも留学生用に1 台購入しました。そのパソコンは、DEC 社製の物であり、CPU はIntel 社製のi486DX66、メモリ容量は確か16MB、ハードディスク容量は200MB 程、OS はIBM 社製のDOS であり、そのDOS の上でMicrosoft 社製のMS-Windows3.1 が作動していました。そのパソコンを作動させてみたら、なんと処理速度が速いこと。私と渡邊義明先生の二人で、「うわー！速ー！」とニコニコしてたのを覚えています。

この頃になると、パソコンをネットワークに直接つなげるようになってきました。但し、MS-Windows95 以前の時代ですから、その作業は面倒でした。LAN カードのIRQおよびポートアドレスが他の拡張カードと競合しないように、LAN カード上のジャンパーピンを手動で移動させるという、ハードウェアレベルでの手動設定が必要でした。MS-Windows95 の発売後は、Plug and Play 機能搭載のLAN カードが発売されたため、ハードウェアレベルでの作業はLAN カードをPCISロットに挿すだけとなりました。

2.2 1990 年代後半

ネットワーク環境はシステムリプレースにより、新しくなりました。学内ネットワークの環境は、通信速度は100Mbps となり、そのケーブルの規格は現在も使われている100Base-T となりました。演習室には、Macintosh ではなくX 端末が設置されており、20 台程のワークステーションがX 端末用のサーバとして設置されていました。最初のシステムでいろいろ起きた結果が反映されたシステムのためか、動作は比較的安定していたことを覚えています。

講座内部では、MS-Windows95 が搭載された今のパソコンが普及していきまし

た。ネットワークとの接続が簡単になり、CPU やメモリと言ったパソコンの内部部品を販売する業者が出てきて、パソコンの自作が可能になりました。私は、パソコンの部品を変えては喜んでいと記憶しています。その反面、今までよく使われていたNEC 社製のPC-9800 シリーズは、使われなくなってしまいました。

1996 年には、Linux のようなパソコン用のUNIX 系OS (PC-UNIX) が、学科内に普及してきました。私は、OS をいくつも用意してはいろいろ試していました。かつて、UNIX 系のOS は高額なワークステーションで使われていました。それがパソコンで使えることに、私は驚いたものです。パソコンの進歩が速いため、個人で使う分にはパソコン上でもUNIX 系OS が十分使える環境にいつの間にかなっていたのでした。

1996 年にはウェブブラウザであるNCSA Mosaic が普及して、現在のネットワークにおける素地が一応揃ったと思います。1995 年前後の環境の変化には、驚かされます。なんとというべきか、今まで溜まっていたエネルギーが爆発するかのようになり、ネットワークが一気に普及していきました。ウェブブラウザによってネットワークサービスの使い勝手が大きく変わったし、何よりもネットワークが大きなビジネスチャンス(カネ儲け) のネタになると分かったことから、その勢いが加速されたと考えています。カネになるモノに対する民間の力の大きさには驚かされたものです。

2.2.1 2000 年以降

2000 年頃になると、かつての勢いは収まり、技術的にはその基礎が一応落ち着いていると思っています。その代わりに、コンピュータウイルスやセキュリティ上の脆弱性を狙った攻撃といったネットワークにおける暗部も普及する事となりました。業務としてネットワークが使われ出して、現在だとネットワークは当然のインフラと化して、その上でのサービスに重点が置かれるようになったわけです。

2.3 おわりに

この文章は、私自身にとっても時代の節目となるちょうど良いモノになりました。分野自体が新しい学科に早々に就いて、そこの学生さん達と同世代という経験は、年齢的にもう二度と味わえません。様々な出来事があったけど、今思えばおもしろい経験を味わうことができました。ありがとうございます。

「研究室づくりなど」

近藤弘樹

筆者は1989年4月にそれまで在籍していた物理学科から情報科学科に移った。移籍早々、情報科学科発足2年目の学科主任になり、その年度末には情報科学科棟が完成して翌年度には引っ越しをしたりして、学科の立ち上げの時期に関わった。学科の立ち上げの頃の話を書くというのもあるが、それは他のメンバーが述べると思われるので、筆者のもう一つの大きな課題であった研究室作りについて記したい。

筆者は名古屋大学工学部電子工学科を経て、大学院は同大理学研究科物理学専攻に進み、そこで素粒子論を学んだ。日本の素粒子論研究グループを築いたお一人である坂田昌一先生の研究室、E研である。院生も研究室で机と椅子を貰い、研究室の活動に参加した。E研では、毎週、興味ある論文を紹介するコロキウムと、新着の論文20～30報を一度に、約2時間の間に紹介する速報が行われていた。論文は全て英文で、D1になると順番でこうしたdutyが掛かって来るのでとても大変だった。コロキウム室ではお茶が飲めるようになっており、研究室メンバーのたまり場になっていた。自分の研究室の席で論文を読んだり、計算をしたりしていたメンバーが時折コロキウム室に顔を出し、お茶を飲みながら話しをしていた。コロキウム室には、新聞や碁盤が置いてあり、メンバーが世間話をしているな、と思っていると急に話題が物理の話になり、黒板で計算が始まったり、また、外からコロキウム室に入ってきたメンバーがいきなり昨日読んだ論文の話しを始めたり、議論を武器に研究を進める研究者の姿を目の当たりにし、研究が生活と一体になっている研究室の雰囲気を実感しつつ、筆者の研究者としての一歩が始まった。

佐賀大学理工学部物理学科には1969年4月に着任した。自分の研究としては京都大学基礎物理学研究所と九州大学の素粒子論研究室に出入りしつつ、助手の時代から卒業研究の担当をさせて貰った。宇宙論と素粒子論をその年その年で取り上げてきた。卒研究生の為の部屋を貰って、卒研究生諸君には居ることができる場所を用意した。週1回交代で卒研究生が主導して行うゼミを中心の活動として、勉強を自由にしても良い場として卒研究生室を設定した。大学で勉強する習慣を身に付けて貰おうと、卒研究生諸君に週当たりの勤務時間を義務づけたこともある。物理学科の卒研発表は、学科全体としては、行った年もあり行わなかった年もある、という風だったが、自分が担当する卒研究生については毎年必ず発表会を行い、卒業論文提出も義務づけた。物理学での、特に理論での

卒業研究は、学問の性格上、それぞれの学生が勉強したことをまとめる、という形になる。毎年学生諸君は必死に取り組んだ。「主体的に勉強する」、ということは3年生迄の、授業を受ける形の勉強では実現しないものであり、卒業研究は学生諸君にとって、学科での勉強の内、最も良い形の勉強の機会になっていたのではないかと思う。

情報科学科に移り、研究室作りの上でまず考えたことは、良いスタッフに来て貰うことだった。1990年4月には、只木進一さん(現情報基盤センター教授・センター長)に来て頂いた。只木さんは、ポスドクとして京都大学で物性物理学・宇宙物理学を研究していたが、情報分野に新しく取り組もうとして着任された。着任当初は、筆者と同じ知的教育システムの研究に取り組んだが、まもなく複雑系の科学の分野をご自分で切り開いた。只木さんとは、着任当初から、そしてその後も、学科内単位としての研究室を構成していた。

渡辺健次さん(現知能情報システム学科教授)は、物理学科で筆者が最後に担当した修士の学生だった。卒業研究の時代から物理学科の計算機室に入り浸り、パソコンの端末ソフトを開発したりしていた。当時九州大学を始めとする大学共同利用の大型計算機を電話線とモデムで結び、データをやり取りするパソコンソフトを開発し利用することが始まっていた。彼はその端末ソフトを自分で開発した。渡辺健次さんは1989年7月情報処理センターに就職した。丁度整備されつつあった佐賀大学の学内LANをインターネットに接続したのは彼の最初の大きな仕事である。以後、佐賀大学のネットワークの発展を牽引しつつ、インターネットの応用の分野で現在に至るまで活躍している。彼が就職した機会に筆者との共同研究を復活した、今度は知的CAIの開発研究の分野で。筆者は情報分野への参入の入り口として、大槻説乎先生(当時九州工業大学教授)、竹内章先生(当時九州工業大学助教授)に知的CAI研究の手ほどきを受けていた。九工大飯塚キャンパスで開かれる毎週のセミナーに、彼が運転する車に乗せて行って貰って参加した。飯塚通いは、学年進行で学科の学生が充足し学科の業務が忙しくなるまで、続けた。彼がインターネットを主要な研究分野としており、筆者が彼と連携してインターネットの普及に取り組んだことが、その後、研究グループのテーマとして教育システムとインターネットを組み合わせる研究を発展させたことに繋がっている。渡辺健次さんは1993年4月から和歌山大学に移ったが移籍後もインターネット上のテレビ会議などを用いてセミナーに参加して貰い、共同研究を続けた。1999年4月には佐賀大学に戻って貰った。

岡崎泰久さん(現知能情報システム学科准教授)は、九州大学の素粒子研究室出身の秀才である。大学院博士課程に進学したが、素粒子論分野の研究者として

の就職状況が悪くなっている中で、他分野への転身を考えられていた。情報分野の将来性について話し合いをし、学科に来て貰った。佐賀大学ではずっと筆者と同じ分野で共同研究を続けてきた。

田中久治技官(現知能情報システム学科技術専門職員)の初出勤は、創りつつある学科を象徴する姿であった。1990年4月、丁度情報科学棟が完成し、引越を行っている最中だった。背広ではなく、作業服での出勤をお願いした。以降、学科の学生実験や計算機システムの管理と共に、研究グループのセミナーにも参加して貰い、加えて学生・教員のお世話をお願いした。

1991年4月に、第1回生が4年生になり情報科学科での卒業研究が始まった。私たちの研究グループは、情報科学棟4階の南と北のそれぞれ3スパン程の部屋を、渡辺義明先生のグループと分け合って使った。北側の部屋には、2月に入ったばかりの **Work Station** を中心とする計算機システムを配置し、南側の部屋は学生諸君の居室とした。

卒業研究では、卒研生諸君がそれぞれにテーマを持ち、その一週間に勉強したこと、研究を進めた内容を皆に報告するという形を取った。研究グループのスタッフ全員が参加し、教員からは報告者に対して質問が飛び、今後の課題を明らかにする議論が行われた。学生がそれぞれの「研究の進捗状況を報告する」という形は、研究グループではこの頃確立して、それは現在も続いていると思う。

情報科学科でも卒研のハイライトは、卒研発表であった。卒研生諸君は発表会に於いて、それぞれ8分の発表と2分の質疑応答を義務付けられる。限られた8分という時間の中で自分が言いたいことを聴衆に伝える。何をいうべきであって、それをどう伝えたらよいか、やってみて、また自ら考えることを強制される。プレゼンソフトに視覚的にどう表現し、また、自分はどのような言葉を発するべきか。表現を考える中で、研究の中身についても自ら再考することが求められる。まさに「表現することによる学び」が実現される。最終的な発表の場は後輩達も参加する学科での発表である。研究グループの教員も参加するリハーサルも行ったが、卒研生諸君が自分達でお互いに聞き合い、意見を言い合い、直し合うのが、研究グループの伝統になった。学科での卒研発表の前日に、卒研生諸君がお互いの発表練習を続ける中、明くる日の発表に寝過ごすことを恐れて、大学に泊まる学生も出てきた。スタッフは、勿論、然るべき時間に帰宅した。

理工学部での学習形態は、3年生迄は授業を受ける、という形で、与えられた内容を理解するという学生諸君に取っては、言わば受け身の活動である。卒業研究になって、学んだことも「報告する」という形になり自分の頭で主体的

にまとめることを要求され、更にそれぞれの卒研テーマについて自ら「考えを創る」ことを迫られて、「カルチャーショックだった」との卒研生諸君からの感想を度々耳にした。「考えない若者」、「応用能力に欠ける日本の若者の学力」が嘆かれる今、理工学部で一般に行われている卒業研究の意義を再認識し、また、世間にも認めて貰う必要があるのではないだろうか。

卒研生、大学院生は研究グループの中心である。その学生諸君の大学に於ける「居場所」を確保し、そこでの勉学をワークさせることは、研究室づくりを通してのテーマであった。お茶は勿論、インスタントラーメン位は食べられる環境を用意し、学生諸君に研究室に居ることを、半ば強制した。後には、出勤時間を義務付けた学生諸君も居る。麻雀は勿論禁止。漫画本も「歓迎しない」という雰囲気を出した。筆者が大学院時代に過ごした、博士課程を中心とする院生とスタッフだけから成り、皆が「研究をする」という目的意識を持っている研究室と違い、1年後には殆ど就職する卒研生と、必ずしも研究者になるという目標を持っていない修士課程の院生を中心とする研究室に於いて、研究室を勉学の間として機能させるためには、スタッフからのある程度の強制力が必要であると考えた。学生の勉学する場としての研究室づくりは、かなり機能したと思う。報告日の前日の夜が多かったが、夜中まで、というより朝近くまで研究室の灯りが点いていた。中には、背もたれ付き回転椅子を三つ使い研究室で寝て、朝風呂に入り下宿に帰り、また研究室に出てくるという生活をする院生も現れた。学生はお互いに話しをして学ぶ。特に進歩が早いコンピュータの世界では、人に聞いて学ぶことが多い。学生諸君の居場所を作り、「学ぶ場」としてワークさせたことは、研究室のポテンシャルをアップさせたことになったと思う。

1994年7月、大和中学校と武雄北中学校とを佐賀大学を經由してインターネットで結び、テレビ会議システムやWWWなどマルチメディアが利用可能になったインターネットを学校教育の分野でどのように使えるかを検証する実証実験を行った。渡辺健次さんの提案で始めたこの実証実験を我々は「グローバル・クラスルーム・プロジェクト」と名付けた。大和中学校と佐賀大学、武雄北中学校と佐賀大学をそれぞれ128Kbpsの回線で一週間だけの臨時回線で結んだ。佐賀大学はインターネットに接続されていたが、回線が9Kbpsから128Kbpsに増強されたばかりであった。現在から見ればとてもブロードバンドとは言えないが、当時はそれが精一杯であった。ブロードバンドが日本で叫ばれる数年前のことである。

「グローバル・クラスルーム・プロジェクト」は、初等中等教育の分野でマルチメディアを用いたインターネットの教育利用を探る日本で初めての実験で

あった。佐賀県教育センターの先生方と、パソコン通信に関心のあった先生方の参加を得て、2つの中学校間での環境問題をテーマとした交流授業とそのインターネットへの中継、WWWを用いた環境問題の授業、多くのクラス間交流、生徒会間の交流と討論、社会人と中学生の討論交流、果てはブラスバンドのインターネット中継と当初の計画を超えた盛り沢山の試みが行われた。実質4日間という短い期間であったが、この実験は、「交流」、「コミュニケーション」が教育の場で果たす役割の大きさを確認し、またWWWというインターネット上の知識が教育の場も含めて人類に大きな影響をもたらすことを予感させるものとなった。この実験の様子はNHKテレビでも全国中継され、西暦2000年の日本政府のミレニアムプロジェクトに於ける「教育の情報化」にも繋がるものであった。映像を映すために透過型の液晶プロジェクタを使い、少しでも明るくする為に強力なOHPを借り、暗幕を使って教室を暗くした。一方の中学校では、実験に使った教室に冷房が無く、夏の盛りの時期であり、とても暑かった。Work Stationの操作はもとより、テレビカメラを操作する者、マイクを運ぶ者、チャットで連絡を取り合う者、2つの学校に数人ずつ、スタッフと学生が協力して技術サポートを行った。2つの学校とそれに佐賀大学にと、まさに研究室総出でこの実験を支えた。インターネットと教育システムに関心を持つ研究グループ無しにはこの実験はできなかったと思う。実験に使用した機材の一覧表を作って、その中心部分の殆どが借り物であったことを再発見して感慨深かった。機材は、佐賀大学情報処理センターを始め九州や東京の大学から借りたものだった。この実験が成功した背景には、インターネットの普及を願う研究者の協力・支援が大きかった。後に、この実験に参加した教職員皆で教育システム情報学会の論文賞を受けた。

1996年3月、研究グループは情報科学科棟の北隣に新しく建設された理工学部6号館に引っ越しをした。それまで入っていた情報科学科棟では、学生の為の研究室が4階にあり、教授・助教授の研究室が2階、助手・技官の研究室が3階という風に分かれていた。2階には事務室があり、教員がお茶を飲んだりして溜まることもでき、また同じフロアなので相談したいことがあればすぐ研究室を訪れることができるなど、教授・助教授の間のコミュニケーションには大変都合が良かった。しかし、たった2階ではあるが、上階の学生が居る研究室に行くのに意識的努力が必要で、一日に一回訪れるのがやっとであった。また、折角学生の居る研究室に行っても、取って付けたような感じになり、何か落ち着かない感じがしていた。

学科に講座増があり、「どれかの研究グループが移らないか」、という話があった時、教員間のコミュニケーションにはマイナスになるであろうが、研究

グループの中のコミュニケーションにはプラスだろうと判断して、引越をすることにした。教員間のコミュニケーションには電話を使うこともできる。

引越は成功だった。学生の居る研究室に長く滞在する時間は既に無くなっていたが、訪れることは容易にできるようになった。筆者は一日に数回紅茶(コーヒーのこともあったが)を飲む習慣がある。紅茶の設備を学生の研究室に置き、そこで紅茶を入れれば、紅茶を入れている時間だけは、研究室に居て、その雰囲気を見、何が必要か考えることができる。また、学生に声を掛けることもできる。学生の顔を見ると話すべきことを思い出したりもする。一見小さなことに見えるが、研究室の運営を考えていく上では大きなことだったと思う。

最後にもう一つ書き残しておきたいことがあります。それは、学内共同センターの教員と学科との関係、です。2000年に理工学部学部長より「情報処理センターを学術情報処理センターに拡充する。については教職員を学科からセンターに移動して欲しい。」旨の依頼があった。学科にとっては、学科の教職員が抜けることは痛手である。しかし学科には、「学科は佐賀大学の情報化を担う役割を持っている。」との認識があった。それで、学部長の要請を受け入れることにした。この教職員の移動に関連して、学科としてもう一つのことを考えた。それは、センターの教員が佐賀大学の情報化の為に生き生きと働くことを、学科としてどう支えるか、ということである。大学教員が、情報処理センターのような学内共同センターで生き生きと働くことには、一般には困難がある。それは、学内サービスとしての業務に追われてしまい、学生諸君と関わりながら一緒に研究を進めることが難しくなるからである。教員がセンターに在席する理由は、定型的業務をこなすことだけではない。研究を進める中で培った姿勢・意識からセンターを見直し、センターの未来を切り開いていく意欲がセンターの教員には求められる。他大学の話しであるが、センター教員が活性を失い、ついにはセンターの業務までもおろそかにしてしまっている事例を聞いていた。

只木さんは、2000年10月から学術情報処理センターに移籍した。只木さんの移籍に当たって、学科では佐賀大学の情報革命をセンターに協力して進めることを誓うと共に、センター教員との連携・支援を強めることを申し合わせた。また、この内容を理工学部教授会で、態度表明した。学科での申し合わせの趣旨の部分を文末に掲げる。

只木さんは、工学系研究科の博士前期課程と博士後期課程の担当教員であったので大学院生の指導を続けることはもちろんであるが、移籍後も卒業研究生を担当して貰い、只木さんが率いる複雑系を中心に研究する卒研生・院生をそのまま学科の研究グループの単位として継続した。実際の運営にあっては、学生の研究室はもとより、卒研生の受入から卒研発表会まで、学科の教員と協力

して一緒に卒業研究・修士特別研究を運営している。只木さんは、現在、総合情報基盤センターのセンター長として、佐賀大学の情報化の先頭に立って大活躍している。上記のような学科の姿勢と努力はワークしていると考える。

おわりに

この原稿をここまで書いて筆者のパソコンの中で眠っている間に、益川敏英さん、小林 誠さんのノーベル賞受賞のニュースが飛び込んで来た。筆者は、益川さん、小林さんと、この原稿の冒頭で触れた E 研時代に一緒に研究をしていた。そのテーマも、今回ノーベル賞を同時に受賞した南部陽一郎先生の「対称性の自発的破れ」を、強い相互作用に適用した研究である。益川さんは、大学院時代、筆者の2年先輩であり、小林さんは3年後輩である。益川さんとは筆者が大学院修士課程に入学した時から一緒に過ごし研究を行った。小林さんはその4年後に共同研究に加わった。丁度2人が京都に揃いノーベル賞受賞対象研究を論文にする1973年頃まで、筆者は佐賀に居て共同研究をしていた。

2006年5月1日に最終講義をした。その準備の過程で大学生活を総括して改めて E 研が自分の大学生活の原点であると強く認識した。繰り返しになるが、筆者が E 研で見たものは、「素粒子の世界を理解したい」という共通の願いの下で、議論という形で自らの考えを他人に伝え、他人の考えを聞き、活発に議論することで自らの脳を活性化して、自分の考えを進めようとする研究者集団である。もちろん自分でも勉強するのであるが、他人とコミュニケーションすること、議論が研究室の活性の姿になっていた。

筆者の佐賀大学での活動を振り返ると、物理学科の時代、情報科学科・情報システム学科の時代を通じて、E 研で経験した「人の知的活動の形」を何とか佐賀大学で実現しようとして努力した足跡であったように思う。そしてそれは、一部ではあるが、研究室の中で実現できたと考える。

翻って、日本の現在の教育を考えると、中学校、高等学校の中等教育では、「大学入試に合格する」という目標の為の勉強が行われているように思える。「試験」は、学んだことのサンプリングテストでしかない。人の「生きる力」となる「考える力の育成」は、授業という学習活動ならば、「授業の中とそれを受講して自ら考えること」の中にあるはずである。「講義を受講する」ことも、それが受講者の頭の中に残るためには、「考えつつ聞く」という主体的努力が必要である筈である。ところが、「試験に受かるために勉強する」という目的のすり替えが起きてしまっている。

大学は、そうした中等教育の歪みを正す立場にある。その大学で、今、教育改革が言われている。しかし、熱心に行われているのは JABEE や大学評価など、外側からの人間の評価であるように思える。「学生が大学で生き生きと学ん

でいるか」など、教育で一番大切な人間の内側に入った視点で問題を捉え、改善を試みる活動は、弱いように思える。

大学では、また e-Learning、FD など教育技術を用いたり、向上させる試みが行われている。教育技術へ取組は、ICT 革命の時代にあつて「知の製造・流通業」を担う大学として、必要な事柄である。しかし、教育技術はあくまで教育の道具である。

学生の「学ぶ意欲」を引き出し、「生きる力」、「考える力」を身に付けるために、「主体的に学ぶ」、「考えつつ学ぶ」、「自分の考えを他人に表現して、議論することにより自らの考えを鍛えていく」といった教育の原点に立ち返つて、それを大学で実現するためにはどうすれば良いか、大学教員が皆で考える必要があるのではないだろうか。

添付

2000 年 8 月

只木氏の学術情報処理センターへの移籍に当たつての学科申し合わせ

知能情報システム学科

趣旨

情報革命の黎明期にあたる現在、大学は知識の生成・流通機関としてフロンティアに位置しなければならない。この時期に設立された佐賀大学学術情報処理センターは佐賀大学における学術情報を支える基幹情報システムを統括するとともに、大学の学術情報環境の整備推進及び電子図書館機能の充実を図ることを目的とした全学共同利用施設である。学術情報処理センターが扱う情報は全ての学問分野に関わると同じに、学術情報処理センターは大学の情報革命を進める中心に位置する。しかし、その任務の大きさにも係らず、現在の佐賀大学の学術情報処理センターはその規模が小さく、大学の情報革命の進展を担うには不十分である。そのため、学術情報処理センターをサポートする学科が必要不可欠であり、知能情報システム学科に期待が注がれることは衆目の認めるところである。

そこで、情報革命の先頭に立つて教育研究を推進している只木教授の移籍に際し、同氏が学術情報処理センターにおいてその責務を遂行し、同時に知能情報システム学科の学生、大学院生に対する教育研究を実践できるように連携・支援を行う。

以下略。

知能情報システム学科の時代(1997年度～2007年度)

記録しておきたい思い出話

山下義行

2001 年から佐賀大に在籍している。まだまだ新参者と考えていたが、既に7年が経過していたことに気付き、啞然としている。「記録しておきたい思い出話」などほとんどないに等しいのだが、敢えて挙げれば以下のような事項になる。

佐賀大に移ってきて驚いたことは、会議が多い、長いということであった。研究時間が欲しいだろう若手（私も欲しい！）が反乱を起こさないのが不思議だった。これまで2回学科長を任せられたが、その際にはできるだけ学科レベルの会議を減らすように、短時間で終わるように努力したが、私の場合には必ずしもうまく行かなかった。2007年度に渡辺健次教授が学科長に就任され、これまでのやり方が大幅に変更され、だいぶ教室会議の回数が減った。できれば教室会議は月に1回程度にしてほしいが、学科だけの努力ではできそうにない。

佐賀大に移った年がちょうど新カリキュラムを検討する時期であった。そのときに他大学から移ってきた者として新鮮な意見を出すことが（少しだけ）期待されたように記憶している。カリキュラム案を眺めてみると、プログラミング教育の開始時期が2年生前期からになっていて、それが遅すぎると感じ、「半年前倒して、プログラミング教育は1年生後期から始めた方がよい」と意見したことを記憶している。これがそのときの唯一最大の貢献だったように思う。

佐賀大に移って2年目に学科長を任された。ちょうどJABEE申請を行う直前の年に当たり、制度設計に深く関わった。中でも個人的に心を砕いたのは「教員が他の教員の授業を審査せねばならない」という点だった。審査を文字通り制度化してしまうと、教員が審査する側／される側に別れて、教員間の友好関係が悪化するのではないかと懸念された。そこで儀式的なものではなく、互いに高め合うフランクな議論の場になるような制度設計になるように意見や制度案を出した。幸いにして、これまでのところ、うまく機能しているようである。

最後になるが、佐賀大に移って分かったことは「この学科のスタッフは皆、仲が良い」ということである。これは大学の常識からすれば驚くべきことである。これを良き伝統として、しかも適度の緊張感を欠如することなく、次の10年へ進んで行くことを期待したいし、努力したい。

記憶を記録すること

渡辺健次

情報科学科設立のころ近くに居り、他の大学に在籍していた頃も時々(しばしば)顔を出して居たので、この 20 年全てに関係しているように思われがちですが、実は本学科に着任したのは 1999 年であり、今年 2008 年度がちょうど 10 年目ということになります。

この約 10 年間を振り返ってみると、優秀な学生さん達に恵まれたなあと思えます。着任初年度、知らない先生の研究室を選ぶ人なんて居るのかなあと思っていたら、インターネットというテーマ設定が良かったこともあり、6 名もの優秀な学生が来てくれました。そのうち何人かとは、今もいろいろな場面で顔を合わせるがあります。この年の学生が作った「ウェブメーカー」は、大ヒットソフトウェアとなりました。

前任校では卒業研究を担当することが無かったので、卒研のゼミ、修士、そして博士の指導も、知能情報システム学科に着任してから経験しました。卒研の指導を手探りで初めて、最初の数年間は模索を続けていたように思います。十分な指導が出来ていたかどうかは判りませんが、学生のレベルが高かったこともあり、毎年充実した卒業研究が出来たと思っています。ありがたい限りです。

毎年多くの卒業生・修了生が巣立っていきます。第 5 研究グループも、1 期生から数えて 213 名の学士、56 名の修士、7 名の博士を出しています(2008 年 3 月末現在)。縁あって第 5 研究グループの一員となったのだから、卒業後・修了後も何らかの関係が保てればいいなあ。ずっとそう思っていました。

そこで 2007 年度から「第 5 研究グループメールマガジン」を始めることにしました。内容は研究室の近況(卒研、修士の紹介など)、教職員リレートーク、卒業生からのメッセージ、その他で構成されています。近藤先生が定年退職された際に、第 5 研究グループの全卒業生のリストを作成したので、可能な限り全ての関係者に送っています。

メールマガジンで 1 期生の学生にメッセージを書いてもらいました。学科設立当時の話は、今の学生にとっては初めて聞くことばかりで、ずいぶん新鮮に感じるようです。昔のことも、きちんと記録して残しておかないといけないなあ。

という思いから、知能情報システム学科 20 周年記念誌を作ることを発案しました。忙しい中、原稿を作成していただいた全ての皆様に感謝します。

知能情報システム学科着任後の8年間を振り返って

皆本 晃弥

私が本学科に着任してから最も力を入れてきたのは、数学教育や卒論指導などを中心とした学生への教育であるが、これについては、日本数学会の数学通信や数学教育学会誌でも述べる機会があったし、卒論指導については卒業生が述べてくれるだろうから、ここでは、研究グループや学部・学科運営に関する事柄を中心に振り返ってみたい。

システム管理

私が着任したのは平成12年4月で、最初にやったことが、第2研究グループのシステム管理であった。これは現在まで続いている。20歳台後半の目標が「30歳になるまでにシステム管理をやめる」ことだったが、その夢かなわず、そこで、30歳になって、「40歳になるまでにシステム管理をやめる」という目標を立てて、前任校である九州大学から佐賀大学に移ってきたが、今のところ、この夢はかないそうにない。その流れで、平成14年と平成18年の教育用電子計算機システムの仕様策定に関わることになった。今となつては、前任校から本学科に移るとき、ある学生に「結局、皆本さんは自分で手を出そうとしますよ」と言われたことが思い出される。

オープンキャンパス

システム管理の次に行ったことは、オープンキャンパス実行委員としての仕事であろう。平成12～13年度は理工学部のオープンキャンパス実行委員、平成13～14年度は全学のオープンキャンパス企画・運営委員を務めた。ちょうど、平成12年が佐賀大学にとってオープンキャンパスを本格的に始めた年で、各学部をゾーンに分けて色々な展示やスタンプラリーをしていた。理工学部はハイテクゾーンとして全学科、本学科では全研究グループが何らかの展示を行っていた。現在もある研究グループ紹介のパネルは、その当時に購入されたものである。ちなみに、オープンキャンパスにおける本学科のテーマは「コンピュータが創る新たな世界」(平成12年)、「来て、見て、使って、IT体験」(平成13年)、「ITの創るe-世界」(平成14年)、「Enjoy IT!」(平成15年)であった。平成12～13年は、大学説明会に合わせてオープンキャンパスを8月上旬に行っていたが、平成14年は大学際と時期を合わせて行った。結局、これら3年間の実績を踏まえ、平成15年度からはオープンキャンパスの規模を縮小し、今の形になっている。また、平成12～14年の間は、理工学部単独でパンフレットを出しており、私とその編集およびホームページ作成を行っ

ていたため、大変だった。さらに、企画・運営委員であったときは、全学科のパネルの数、それをとめるネジの数、場所、レールの位置など、さまざまなことを学部内で調整しなければならなかった。それだけでなく、パネルを展示するはずの場所に、荷物を勝手に置いていた教員（オープンキャンパスが浸透していなかったので仕方ないところはあるが）やパンフレット・ホームページの誤字・脱字などに対する教員からのクレームへの対応など、振り返ればいろいろあった。オープンキャンパス後の報告書作成も取りまとめに苦労した。オープンキャンパスを通じて、学部全体をまとめるのがいかに難しいかを痛感したが、この経験のおかげで、全学や学部内の組織が多少なりとも分かりやすくなった気がする。

教育制度の改訂

「教育制度の改訂」というと、少し仰々しいような気がするが、ここでは教務委員に関連する話をしたい。平成13～14、18年度は副教務委員、平成15～17年度は教務委員、平成15年度は大学教育委員会委員でオンラインシラバス専門委員会委員長を務めた。また、平成19年度からは高等教育開発センターも併任しているため、結局、平成13年からは教育に関することにどっぷり浸かっている感じがする。特に平成15年度は佐賀大学と佐賀医科大学との統合にともなう規則の整備に追われ、さらに、オンラインシラバス専門委員会委員長としてオンラインシラバスの仕様変更、事務方との交渉など、肉体的にも精神的にもあまり余裕がなかったような気がする。ちょうど、平成16年度には、全学教育センターから教養教育運営機構へと名称・組織変更があり、その年度が医科大学との統合後、初めてのオンラインシラバスの運用であったということもあり、かなりトラブルを警戒していた記憶がある。

さて、学科内に話を絞ると、JABEEとカリキュラム改訂などに関することが思い出される。平成15年度から実施された現在のカリキュラムの検討を始めたのは平成12年度で、平成13年度からはJABEEも考慮した形で検討することになった。着任時から、教育に関する話に深く関わったことは大変ではあったが、いい経験になった。カリキュラム設計時の基本精神は、JABEEのためにカリキュラムを変更するのではなく、新しいカリキュラムをJABEEに認めてもらう、認めてもらわなければ、それはそれでもいい、というような感じだったと思う。議論が最も活発に行われたのは、平成13年度であった。カリキュラムの改訂を行う際には、情報処理学会のJ97やACM/IEEEが共同で策定したコンピュータサイエンスカリキュラム（Computing Curricula 2001, 略称CC2001）、さらには、1998年の外部評価も参考にしたと記憶している。ちなみに、現在のカリキュラムとそれまでのカリキュラムの主な違い

をまとめると、次のようになる。

- 実験着手要件が追加（2年次から3年次へのハードルを設ける）
 - この要件が入る前は、必修科目を多く残したまま卒業研究に着手し、当該科目の受講態度が悪く結果的に再試験を何度行っても卒業できない学生がいたが、現在ではそのような学生はいない
- 必修科目が58単位から69単位へ、それに伴い選択科目が26単位から16単位へ
 - 専門性を高める
 - 必修科目だけでほぼJABEEの分野別要件を満たすことが可能
- 「大学入門科目（フレッシュマンセミナー）」の内容を一新
 - 「大学入門科目」を高校生から大学生への転換教育と位置づけ、いわば「大学の歩き方」を教える科目にする。大学で勉強する方法、大学を生き抜く方法などを教えることにした点は、従来の情報処理入門とは大きく異なる。
 - 現在の新生オリエンテーションの形ができたのは平成16年度である。数学テストの導入や、教務関連の話の簡略化などが行われた年である。このようなことが可能になったのは「大学入門科目」で2回に渡って教務関連の話ができるようになったからである。
- 「自主演習」、「技術文書作成」、「科学英語」といった従来の科目の延長上にならない科目の追加
- プログラミング科目と数学科目を1年次に実施（従来は2年次）
- 実験科目を4科目から5科目へ

また、GPA制度が導入されたことも忘れてはいけないであろう。学科にGPA制度が本格的に導入されたのは平成17年度で、この年から成績順に研究室配属が行われるようになった。これが導入されたのは、学生から「成績順で卒業研究の配属を決めて欲しい」と要望があったためである。それまでは、学生間の話し合いで研究室配属を決めていたが、過年度生の意見が通りやすくなる、真面目に勉強した人の努力が報われない、くじ引きやジャンケンでは学生間で何らかの恨みを残す、といった問題があった。この学科GPAの導入の結果、学生間のトラブルは、ほぼなくなったようである。そして、学科GPA制度の大きな特徴は、「不可」や「放棄」の情報がずっと残ることにある。後に平成19年度からGPA制度が全学的に導入されたが、そこでは再履修して合格すると「不可」や「放棄」の情報が消えてしまう。このようになったのは、合格している科目も再履修を認めている海外のシステムをそのまま導入したためだと思われるが、全学の制度より本学科のGPA制度の方がフェアだと思う。

最後にJABEEについて触れておこう。今から振り返れば、平成15年か

ら平成19年度は本当に過渡期であった。JABEEを受審した平成15年度には、新旧両方のカリキュラムが動いていた。また、平成16年度以前の入学生が知能情報システム専修プログラム（いわゆるJABEEコース）を修了するためには、全科目でおおむね「良」以上の成績が必要であった。平成17年度入学生からは、その条件が廃止され、ついに平成20年度入学生からは知能情報システム総合プログラム（いわゆる非JABEEコース）が廃止されてJABEEコースに一本化されると同時に、プログラム名も「知能情報システム学科」となる。JABEEコースに関しては、微小な変更が数年続いたが、ようやく落ち着いたものになりそうである。

数学教育

冒頭に述べたように、ここで、数学教育について詳細に述べるつもりはないが、学科の協力を得て行ったものとして「自習の義務化」があるので、これについて触れておこう。今では、学生から「自習は春の風物詩」といわれるようになったが、これが始まったのは平成15年度であった。自習を監視するためのTAを雇い、ときには他の先生が見回りをすることもあった。これは学科の協力がなくては行えない。この方法は、日本数学会の数学通信や数学教育学会誌において報告し、反響が大きかった。学科の協力が得られているという点は、あまり他大学の教員からは信じてもらえない、という感じである。また、このような学科の協力がなければ、平成16年度に情報処理学会から優秀教育賞をいただくこともなかったであろう。

その他

記録しておきたいこととして、第2研究グループが理工学部7号館から6号館へ移ったことを挙げておこう。私が着任したとき、私の部屋は理工学部7号館207室で、第2研究グループの院生室が301室、卒研着手者の部屋（学生室）が403室であった。その後、平成16年度に、私の部屋が理工学部6号館210室になり、院生と卒研着手者は106室に入ることになった。学生間の交流を考えると、1部屋に院生と卒研着手者が入ることになったという点は大きい。また、従来は学生室にサーバを置いていたが、サーバ室が新たに105室に設けられたため、学生室の環境もよくなり、学生の不注意でサーバが落ちる、という心配もなくなった。なお、平成20年度には、第2研究グループは理工学部6号館2Fに完全に移る予定である。これで、教員と学生間の関係も深まるのではないかと思う。こちらもJABEEコースと同様に平成20年度に落ち着きそうである。



学生室が理工学部7号館403室だったころ（平成15年）

知能情報システム学科の時代

松前 進

「20周年記念誌を発行するので、思い出話を寄稿せよ」との話が来ました。ところが、私は一年前の平成19年4月1日付で当学科に着任した新参者です。以下、「思い出話」というより、着任後の1年間を振り返って感じたことを書きます。

「暗い」 --- 出勤初日に受けた一番の印象はこれです。ただし、「根暗」とか「重い雰囲気」などという意味ではなく、ただ純粹に「光量不足で暗い」という意味です。私の所属は第2研究グループで、居室は理工6号館2Fの奥（皆本先生の部屋の隣）にあるのですが、そこへ辿り着くまでの廊下が非常に「暗い」のです。「環境に配慮して消灯しているのか？佐賀大学ってこんなに環境に優しい大学なのか？」と最初思ったのですが、どうもそうではないようです。どなたかのポリシーなのか、単に誰もスイッチを入れないだけなのか --- とにかく、着任後1年経った今でも、毎朝「暗い洞窟の奥深くへ進んでいく」という儀式を行いつつ、仕事スイッチを on にしています。



(普段. 名作ザナドゥの Cave?)



(点灯時. 滅多にない.)

問題の廊下

初年度の授業担当は「データ構造とアルゴリズム」「プログラミング概論 I」「科学英語 II」(以上学部), 「計算機アルゴリズム特論」(大学院) でした。初年度ということで随分負荷を減らしていただき、皆様には大変感謝しております。2年目の平成20年度からは、他の先生方と同様の担当ロードになりましたが「皆さん良く研究の時間がとれるなあ」と感心しています。早く定常状態にもっていきたいところです。

当学科の研究室は「研究グループ」という形態で数人の教員で（ゆるい）グループになっているということで、着任したての頃は不思議な感じがしました。「学生が寂しくないように」との配慮でこのような形態になったとの話を聞いたのですが、新参者の私にも「寂しくない」という点で、嬉しいシステムでした。（同研究グループの上原先生と皆本先生は、大変お世話になっております。）ちなみに、私の研究室への卒研配属は5名でした。まあ、いろいろありましたが、詳細は省きます。

最後に、学生の印象について一言。佐賀大学は私にとって3つ目の勤務大学です。こちらの学生の印象は「元気な学生もいるが、全体的に大人しい。」というものです。「もっと質問などに来て、教員にくっついてかかるぐらいの元気が欲しい。」というのが正直な感想です。前任校では、毎週のレポートの締切日には必ずと言っていいほど研究室にやって来て居座ってレポートを仕上げ帰る学生が複数居ました。また、前々任校では、面倒見の良い先生が院試問題の質問に来た学生に捕まって質問攻めにあい、数時間付き合わされた挙げ句に「分からん。勘弁してくれ。」と泣かされたという話もあります。これらのことを考えると、佐大生は少々shyなのではないかと思えます。もうすこし元気に、積極的に動いても良いのではないのでしょうか。

以上、赴任一年を振り返っての雑感でした。

P.S. 最近はかかってきませんが、着任当初は間違い電話が何件かありました。私の居室の前住人(松添先生)宛の電話なのですが、どれも「まつ〇え先生ですか？」ではじまり、早口で言われると最初はピンときませんでした。「まつまえ」と「まつぞえ」では一字しか違わないというのも奇遇です。

知能情報システム学科の思い出

山形大学工学部
情報科学科
ライエル グリムベルゲン

私は 2001 年から 2004 年まで知能情報システム学科に勤めました。短い期間だと思われるのですが、思い出がたくさんあります。大学で仕事するのはここが初めてでした。オランダから 1995 年に来日して、6 年間はつくば市の研究所の研究員でした。任期が終わったときに日本で仕事したい気持ちが強くてあちこち応募しました。正直、佐賀大学から面接の招待がきたときに「佐賀ってどこ？」と思いました。しかし、普通のところではないことは最初から分かりました。面接の前日は佐賀に行って、新井先生と打ち合わせしました。予定は大学内のゲストハウスみたいなところに泊まって、次の日を面接すること。しかし、新井先生はゲストハウスの鍵がなくて、予定変更になりました。新井先生の家のソファで泊まってもらいました。今は「新井先生らしい」と思っています。形式的より柔軟な対応が大事なのは知能情報システム学科の特徴でした。

知能情報システム学科で初めての講義と学生の指導で他の先生達と学生に色々迷惑を掛けてしまいました。2001 年 9 月 11 日（アメリカでテロ事件の日）はテレビを見ながら「情報理論」の講義を準備しました。専門でもなかった講義の準備は他の先生（特に林先生、皆本先生と奥村先生）が丁寧に説明してくれて助かりました。大学の先生は一人の世界を作っているところが多いのですが、知能情報システム学科には「チーム」が強く感じました。

知能情報システム学科の焦点は事務室でした。大川さんと林先生の「バリバリトーク」は今でも思い出します。先生と秘書さんではなく夫婦のようでした。特に林先生が毎日体重を測ったときに厳しいコメントが多かったです。しかし、大川さんの母校が甲子園で負けたときの泣いた姿は今でも自分の心に残っています。事務室で悩みの相談、皆本先生とのワインの話、寺山先生と岡村先生のサッカーの話はとっても楽しかったです。今の大学にはそういう場所がないと非常に寂しいです。

結論として、知能情報システム学科の先生は皆優しすぎると思います。3 年間では一回も委員になっていません。何も分からない外国人の私に非常に優しくかったです（今の大学は全然違います）。結局私のポストは 3 年間の任期付でしたので知能情報システム学科をやめなければならないことになってしまいました。それでもぎりぎりまで次の仕事が決まなくて、最後に山形大学になったときに新井先生とハグしたのは感謝の気持ちでいっぱいでした。

知能情報システム学科とあまり関係がないのですが、個人的な思い出もたく

さんあります。長女理紗が産まれたのは佐賀の病院でした（佐賀の病院で泣いてしまいました）。いつか子供を連れて産まれたところを見せたいと思います。佐賀の若者のサッカーチームに入って初めて歳を感じたことも佐賀の思い出の一つです。ところが、ガソリンが1リットルで79円も佐賀にいたときでした。かなり昔の話と思われませんが、意外に最近でした。

ということで、私にチャンスを与えて、暖かい気持ちで見守ってくれた知能情報システム学科の皆さんに本当にありがとうございました。短い期間で私の気持ちは「佐賀ってどこ？」から「佐賀って最高！」に変わりました。それは全て知能情報システム科学の先生のお陰です。

20周年は本当におめでとうございます！

佐賀大学での6年間を振り返って

名古屋工業大学大学院工学研究科

情報工専攻

松添 博

平成11年4月に佐賀大学へ赴任し、その後平成17年3月まで理工学部知能情報システム学科にお世話になりました。その間、延べ1900人ほどの学生に主に数学系科目を講義してきました。また知能情報システム学科在任中の平成15年には、文部科学省在外研究員としてドイツ、イギリスに赴任させて頂きました。ここでは在任中の6年間を簡単に振り返ってみたいと思います。

平成11年度に佐賀大学へ赴任し、初めて大学教官となりました。この頃は学生と年の差が少なく、また友人の弟が受講生にいるなどしたため、不思議な感覚を持ちながら講義をしておりました。研究者生活としては、赴任した当初の平成11年～13年頃がとても恵まれていた時期かもしれません。担当講義や学内委員の仕事も少なく、研究に専念することができました。私の研究の専門分野は数学で特に幾何学ですが、当時お隣の数理科学科には幾何学分野の第一人者である塩濱勝博先生がいらっしゃいました。ときどき仕事や研究セミナーなどでお会いしましたが、「若いうちは研究に専念するんだ!」とお言葉を頂きました。近年の大学は雑務が多くなかなか研究する時間が取れませんので、とても励みになっていました。

平成14年度に入るとカリキュラム改定と JABEE 受審準備、それに在外研究準備のため、急に仕事が忙しくなりました。特にこの年度入学の1年生には、線形代数Ⅰ・線形代数Ⅱ・基礎解析学Ⅰ・基礎解析学Ⅱと、一年間に4コマも講義を担当することになってしまいました。週に何回も顔を合わせ、しかも難しい数学の講義で大変だったと思いますが、みんな熱心に授業を聞いてくれました。ありがとうございました。

平成15年度は在外研究員として、かなりの期間を留守にさせて頂きました。この間 JABEE 受審や国立大学法人化などがありましたが、学科の一番忙しい時期に留守にしたため、学科の先生方には本当にご迷惑をおかけしました。さて、私が在外研究に出発したのは2月でしたが、ベルリンは寒いだろうと学科の先生方から半纏を頂きました。そこまでは良かったのですが、「この半纏をドイツに持って行き、ドイツの大学の研究室で着用している様子を写真に撮ってくるように!」と指令を受けてしまいました。日本でも研究室で半纏を着ることはほとんどしませんので、「困った指令だなあ..」と思っておりました。どうしようかと考えておりましたが、たまたま日本人研究者が同じ研究室に滞在する機会があり、事情を話して写真を撮ってもらいました。おかげで無事に帰国

することができました。

少し脱線しますが、佐賀大学在任中の6年間、日々ダイエットに励んでおりました。私は大柄な体つきをしていますが、平成16年度までは同じく大柄な体つきの林敏浩先生がいらっしゃいました。学科事務室に体重計と体脂肪計を置き、毎日体重を量り、2人とも事務室のカレンダーに体重を記入しておりました。今考えると、ずいぶん無茶をしていたと思います。結果ですが、私のほうは6年間で体重は15キロ以上も増加しまい、見事に失敗に終わりました。

現任の大学は予算と人員削減のため、教室事務室というものが存在しません。佐賀大学に在任中は、事務室で他の先生方とお茶を飲みながら雑談などしておりましたが、今ではそのようなこともなくなり少し寂しい気持ちになっております。また、現任の大学はシステムがかなり変わっており、学科、大学院、そして教員の研究組織が全て異なります。したがって「学科に所属する」という考え方が小さく、所属学科の学生と接する機会があまりありません。佐賀大学に在任中は、上でお話したように学生と接する機会がたくさんありましたので、とても楽しく過ごさせて頂きました。

佐賀大学在任中、全国レベルでは国立大学法人化、大学レベルでは佐賀医科大学との統合、学科レベルでは JABEE 受審など、多くの大きな変化がありました。このような変革の時期に情報システム学科にて研究、教育に携わらせて頂き、皆様に大変感謝しております。ありがとうございました。

卒業生・在校生の雑記

卒業生・在校生雑記

佐賀大学 総合情報基盤センター

大谷 誠

私が大学に入学したのは、まだ情報科学科と呼ばれていた 1994 年の事で、卒論を書いていたのが 1998 年なので、学科を卒業してから今年でちょうど 10 年となりました。しかし、大学院博士後期課程を修了したのが 5 年前、そして、そのまま佐賀大学で教員となり学科に係わっていますので、未だに卒業したのだという実感の湧かないまま日々を過ごしています。知能情報システム学科が 20 周年ということは、2/3 以上の長い間係わっていますが、これまでの日々はとても短いものであったように思えてなりません。

大学に入る前は、パソコンに触ったことはあったものの、特にこれといってパソコンに詳しい学生といったわけでもありませんでしたが、離れたところにいる人と簡単に情報をやり取りできる(当時はそう呼んでいた)パソコン通信に興味があり、情報科学科を選びました。入学した当初、情報科学科の演習室には Macintosh Classic II が置かれていました。それでタイピングの試験を受けたときの緊張感や、今では当たり前のホームページを、ブラウザを使って初めて見たときの感動は今でも良く覚えています。また、特に部活やサークル活動をしなかった私は、コンピュータ演習室に入り浸って、日々プログラミングやホームページの閲覧などをしていたため、学部時代の多くの記憶はコンピュータ演習でのものばかりです。

情報科学科の授業では様々な教科を学びましたが、特に演習の科目が印象的でした。画像処理やハードウェア実験、プログラミングといった演習では、同級生と供にいろいろなハードウェアを触ったり、協力して実験をしたりといった活動はとても思い出深いものです。特に卒業研究生となり、研究グループに配属されてからは、より同級生との関係が密接になりました。卒業研究に使えるコンピュータは少なかつたため、利用できない間は、研究室や図書館にある参考書を一生懸命に読んで、勉強したものです。またその他の時間は、同級生たちとそれぞれ研究内容について、議論を繰り返していました。このような同級生や学科での経験は、大学に残り教員として生活することになった要因ともなっています。

私はパソコンやインターネットの発展とともに、この知能情報システム学科で大学生活を送れたことを大変幸せに感じています。また、卒業・修了後も大学に残り学科に関わり、20 周年という記念の年を迎えられたことも大変幸せに思っています。よって、これからも知能情報システム学科が 30、40 年とますます

続いていくことを切に願っています。

皆本研究室で学んだこと

2003年 佐賀大学理工学部知能情報システム学科 卒業

吉田 奈都子

私は、隣の県福岡から佐賀にやってきた。佐賀は田舎であると聞かされていたので、初めてその地におりたったときにはどれほどのものかと興味をそそられた。しかし、都市開発が進み、JUSCOなどというものが建ち、佐賀駅が整備され、田んぼが続くと想像していた私にとっては、逆に“佐賀は都会である”というイメージが植え付けられた。そんな都市で2年、私は編入生として教職をとるべく必死で勉強した。皆本研との出会いもそんな大学4年生のときである。

毎週水・金曜日に行われるセミナーはきつかった。15:00-21:00 は当たり前で、時に日をまたぐ事もあった。無駄な時間は一切なしである。そんな研究に対して熱い先生の前で過ごした1年は私にとって貴重な財産である。

皆本研のセミナーからは、忍耐と根気そして、達成感を教わった。セミナー自体も上に述べたとおりきついものであったが、何よりも事前の準備がきつかった。毎日図書館に10時間缶詰になり勉強する、3日間考えて分からなければ質問に来てよいという方針であったため、さまざまな書を読んで勉強した。1年間の努力が研究論文としてまとまったときにはなんとも言い表せない充足感があった。忍耐と達成は2つそろってはじめて意味を成すと感じた。

皆本先生からは研究以外にも多くのことを学んだが、やはりもっとも勉強になったのは、教師としてあるべき姿である。決して、上から物を申すのではなく相手の立場を考えて接するという事、趣味を持ち見聞を広げること、できないのなら人の3倍頑張ればよいということ・・・そんな教師としてまた人として大切なことを学んだ。今、あれほどまでに生徒のために時間を割いてくれる先生はいるだろうか・・・？

研究室で過ごしたあの時間が懐かしい。だからこそ、卒業して5年が経つ今でも毎年歴代の皆本研が集まり、会が催されるのだと思う。皆本研からは、研究以上に人として成長することを教わった気がする。今、私も教職についているが、生徒に接するときにはこうありたいと思い日々過ごしている。

研究室の思い出

2002 年度 佐賀大学理工学部知能情報システム学科 卒業
2004 年度 佐賀大学大学院工学系研究科知能情報システム学専攻 修了
諸永章充

3年間の皆本研究室生活の中で脳裏に焼きついた言葉があります。

「分からないのは分かるまで調べ考えていないからである。」

研究室に配属された当初は、週に1度のセミナーで、ある課題に対し解決する過程を資料にまとめ、発表していました。そして、質疑応答の際、質問に対する適切な回答ができないことが多くありました。そのたびに調べたつもり、考えたつもりでセミナーに挑んでいたことを痛感し、この言葉をつらく感じていました。しかし、研究室に所属した学生が社会に出て10年、20年先も戦える様に研究に取り組んでいくという先生の熱意が指導をして頂いている中で伝わり、徐々に真剣になって卒業研究に取り組むようになったと思います。私が行っていた研究が社会人になって直接役に立ったことはほとんどありません。しかし、研究を通して、次の4点を学ばせて頂いた事は社会にでて大変役に立っております。1. 物事の枠組みと到達すべきビジョンを描く。2. 事実を分析し必要となる論理を組み立てる。3. 必要な合意を得るため関係者を説得する。4. 必要となる情報をバランスよく構成しまとめ上げる。

また、卒業研究の合間には、先生と同じ研究室のメンバーと一緒に食事に出かけたり、バレーボールやボーリングで汗を流したりとアット・ホームな雰囲気もありました。研究以外で接する機会を多く持つことで、お互いの信頼関係がより深まり、様々なことで相談できる関係を築けたことを覚えています。

実力主義にシフトしていく時代の中で、「自分は一体何ができるのか。」を答えられる人間に導く指導をして頂いたと同時に、人間性も磨く指導をして頂きました。皆本研究室で培った調べ考えるノウハウを武器に今後も精進し続けたいと思います。



謝恩会にて（2005年3月）

第2 研究グループ皆本研究室の思い出・雑記

2004 年度卒 福本 顕也

「ここで1年間本当にやっていけるのだろうか?」。当時、この皆本先生の研究室に決定した瞬間に思った言葉だが、今思うとそんな心配は、まったくもって不要だった。むしろ今となれば、本研究室で本当によかったとさえ思っている。

当時は正直勉強に打ち込んでいた訳ではなく、成績も良くはなかった(そのため選択できずに本研究室に決定したのだが)。さらに、先輩方のうわさを聞くと皆声をそろえて“厳しい”と言う。確かに、自分自身も先生が担当されている基礎解析学の単位を何度も落としており、4年次の春も授業を受けなければならず、厳しいのは重々感じていた。

研究室が決定し、配属され、始めに実施したセミナーが大掃除だった。他の研究室においては、これから利用する机の整理程度だったが、うちの研究室はまったく違った。1日かけて、本当に大掃除なのだ。ぶつくさ言いながらやったのだが、掃除が終わり、きれいになった部屋で一息ついていると、今まで結構遊んでいたのだから、1年間ぐらいはちゃんとしなきゃと気持ちを入れ替えることができた。先生がそこまで考えていたかは知らないが、いいきっかけであったことを思っている。

いざ、本格的なセミナーが始まると、先生は、遅刻をしない、サボらない、毎回必ずレポートを提出しプレゼンをするなど、確かに、他の研究室から見ると、厳しいのだが、実に当たり前のことを重要視していた。今となれば、遅刻をしないなどの心構えや、ここで毎週のセミナーのために資料を作って、プレゼンをしていたので、会社に入社後、この経験がとても役に立った。大学生になって、縛りが少なくなり、怠けすぎて、当たり前のことを当たり前にできなくなっていた自分を正すことをでき、先生には非常に感謝している。

毎週必須の長時間におよぶセミナーなど厳しいことだけではなく、バレー大会や飲み会など息抜きできる部分もあった。オンとオフの切り替えがしっかりできたのもいい点だったと思っている。

また、今仕事で東京にでてきており、卒業したらそれまでかと思っていたのだが、先生が頻繁に東京に来ることもあってか1年に数回の飲み会が恒例となっている。ここで一番感謝したいところが、自分が関わったことのある先輩や後輩だけでなく、先生の学生時代の後輩の方々など、自分よりまったく年上の方々とお酒を交すことができる点だ。自分が東京に出てきて間もなかったころなどに、そういう先輩方の話を聞けるのは非常に勉強になった。こういう人と

の出会いは大切にしたいと思う。

最後に、巖しいとまわりが言うところにあえてとびこんで行く、当たり前のことを当たり前にやる、人との出会いは大切にする、ここで学んだことを忘れずになんばっていききたい。

皆本研究室の思い出

2004 年度卒 島ノ江将己

私は、学部 4 年生の 1 年間皆本研究室で過ごしました。

皆本先生とは私が 2 年生の時、必須科目の講師として出会いました。しかし、毎回レポートが課せられ、講義中には確認テストと学生の私にとっては楽な先生ではありませんでした。そして、運命の研究室決めの日、1 番避けて通りたかった皆本研究室を見事に引き当ててしまい、ここで私は皆本先生と再会することができました。

皆本研究室では社会でも戦える力を身につけるという教育方針のもと指導されていました。研究室に入ってから毎週金曜日にセミナーがあり、1 週間で勉強したことを発表するというものでした。はじめは資料作りや発表内容のまとめに大変苦労しました。セミナー中も指摘、指導が絶えず、つらく思うときもありましたが、人前で話すことにも慣れ、いい経験を積む事ができたと思います。金曜日のセミナーは朝早くから実施されており、木曜日は私も含め朝が弱い研究室メンバーと研究室に泊まって、セミナーの準備をしたり、遅くまで騒いだり今では楽しい思い出です。

皆本研究室の学生は、皆本先生が担当する講義の手伝いをおこなっていました。内容は、WEB から講義を視聴できるようにするための講義ビデオ撮影、中間テストや期末テストの監視補佐などです。そのため、後輩からは皆本軍団として恐れられており優越感に浸っていました。

皆本研究室は他学科や他大学の方たちともバレーボール大会や懇親会を通じて交流があり、ヒトとのつながりを大事にする研究室だったと思います。研究室でも飲み会を開いたり、ボーリングをしたり、夏は学生同士で海に遊びに行った記憶もあります。

この 1 年間で私の勉強や社会への関心や、考え方が大きく変わり、常に向上心を持って行動するようになりました。私にとっては人生を変える研究室生活でした。今後も多くの皆本研究室出身の方々が活躍されることを願い、私も皆本研究室の名を汚すこと無いよう精一杯努力していきたいと思います。

知能情報システム学科(旧・情報科学科)20周年「在校生の雑記」

工学系研究科 知能情報システム学専攻
07535002 池上 耕介(平成15年学部入学)

育ちも生まれも佐賀っ子な私は、佐賀が大好きです。田舎といわれようと商店街がやばいといわれようとも好きです。今も修士の学生として佐賀大学に通わせてもらっています。

でも、佐賀大学へと進路が決まったときの内心といえば、
(うわ、最悪)

と、なんともひどいものです。まったく失礼な奴です。誰だそんなこと思ってる奴は！

なんでそんなこと思ってたのか不思議で、今では佐賀大学に行ってよかったと心の底から思えます！

そんな佐賀大学の生活は楽しい毎日でしたが、裏を返せば予定に追われる日々でした。当時のスケジュール手帳を開いてみたら、なんかしらびっしり予定が詰まっています。よくもまあこっぴごだけ手にかけてたな、という感じです。

なにごとにも経験とはいいますが、限度があると思いました。大学での勉強はもちろんのこと、サークル活動やボランティア活動、アルバイトをしたり車の免許を取りに行ったりといろんなことに熱中していました。

勉強だって、情報系の勉強なんて高校では習わなかったし、毎日毎日授業で出される課題はちんぷんかんぷん。教科書とパソコンとにらめっこしながら、初めてプログラム作ったときはエラーの連続。ほんとに泣けてきました。

でも、やらなきゃよかったなんて思ったことはほとんどないです。勉強の仕方、人との付き合い方、会話の仕方、イベントの組み方、スケジュール調整……。学んだことは言いきれません。

もちろん、その間に旅行やらなんやらちゃっかり遊ぶことも忘れてませんが。

平成15年の春、新歓オリエンテーションからはじまり、入学して、現在研究室で修士研究のかたわらこの原稿を書いている今と、そしてこれから。おそらく就職して佐賀を出て行くことになりますが、四半世紀も過ごした土地を離れるのはつらいです。それでも、人生でこれほど充実した生活を遅れるのは後にも先にもこの時だけだろう、と胸を張って言えるでしょう。

やっぱり佐賀はよかところばい！

資料

情報科学科・知能情報システム学科年表

年	事項	教職員の移動
昭和 62年 1987 年	6月 概算要求提出	
昭和 63年 1988 年	4月 理工学部情報科学科設置(定員40名) 情報基礎学講座設置 (一般教育講座設置(教養部)) 12月 情報処理センター設置	着任: 4月 稲村實、寺本顕武
平成 元年 1989 年	4月 数理情報学・計算機科学講座設置	着任: 4月 上原健、近藤弘樹、掛下 哲郎、杉田洋、岡崎眞紀 転出等: 9月 稲村實
平成2 年 1990 年	3月 情報科学科棟(理工7号館)竣工 4月 学内LAN敷設 4月 情報処理学講座設置 (教授4、助教授4、助手4、技官3、教務職員1)	着任: 4月 渡辺義明、新井康平、只 木進一、松藤信哉、田中久治、 小嶋一生 6月 岡崎泰久
平成3 年 1991 年	2月 教育用電子計算機システムレンタル開始 (MacintoshとUNIX機を中心として構成) 4月 大学院工学系研究科博士課程設置	着任: 4月 寺山康教、松原義継 6月 宮本洋介 転出等: 9月 宮本洋介
平成4 年 1992 年	4月 大学院工学系研究科情報科学専攻設置	着任: 10月 町頭義朗 12月 前田明子 転出等: 9月 杉田洋
平成5 年 1993 年	4月 定員増と講座増(定員50名、知能情報学講 座増)	着任: 3月 桑江一洋 8月 林田行雄
平成6 年	4月 全学教育センター設置、新教育課程発足	着任: 4月 林敏浩

1994 年		8月 杉町信行
平成7 年 1995 年	2月 教育用電子計算機システムレンタル更新 X 端末と UNIX 機を中心として構成 10月 理工学部DC棟(理工6号館)竣工 学科一部居室が移動	
平成8 年 1996 年		転出等: 3月 岡崎真紀 着任: 4月 大川律子
平成9 年 1997 年	4月 理工学部改組 知能情報システム学科(定員60名) (情報基礎学大講座、計算システム学大講座、高次情報処理学大講座) 12月 理工学部外部評価実施	
平成 10年 1998 年	4月 大学院工学系研究科 生体機能システム制御工学専攻設置	転出等: 3月 町頭義朗 8月 桑江一洋 9月 寺本顕武
平成 11年 1999 年	2月 教育用電子計算機システムレンタル更新	着任: 4月 松添博、渡辺健次
平成 12年 2000 年	4月 学術情報処理センター設置	着任: 3月 奥村博 4月 皆本晃弥 転出等: 3月 松原義継 9月 只木進一
平成 13年 2001 年		着任: 4月 山下義行、ライエル・グリムベルゲン、大月美佳
平成 14年 2002	3月 理工学部外部評価実施	転出等: 3月 松藤信哉

年		
平成 15年 2003 年	2月 教育用電子計算機システムレンタル更新 学生持参 WindowsPC を前提として構成 3月 学科一部居室が DC 棟1Fと2Fに移動 10月 佐賀大学・佐賀医科大学統合 新「佐賀大学」設置	着任: 4月 山口暢彦
平成 16年 2004 年	4月 国立大学法人佐賀大学設置 5月 日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定 取得	転出等: 3月 ライエル・グリムベルゲン 6月 林敏浩
平成 17年 2005 年	4月 総合情報基盤センター設置	転出等: 3月 松添博
平成 18年 2006 年		転出等: 3月 近藤弘樹、小嶋一生 着任:4月 越智亜祐美
平成 19年 2007 年	2月 教育用電子計算機システムレンタル更新	転出等: 3月 越智亜祐美 着任: 4月 松前進、羽根由恵